

伊能忠敬

研究

二〇〇二年 第二八号

史料と伊能図

宇宙衛星ランドサットから
撮影した対馬(1)モード・
センシングセンター提供)



伊能忠敬研究会

(表紙図解説)

表紙図解説 元禄国絵図 「対馬」

連載中の宗家文書『測量御用記録』がおわりました。そのなかで取り上げられた元禄国絵図です。朝日新聞平成六年(一九九四)十二月二十四日号に掲載されていました。隣の衛星ランドサットの画像と比べてみてください。正確さが感じられます。

付き回りの中村郷左衛門は、「この図を壱岐にいる忠敬のもとに持参して測量中止を懇請しました。天文測量をしていないから駄目だと忠敬は押し返しますが、確かに本土あるいは壱岐、五島との位置関係は絵図方では決定できなかつたでしよう。

郷左衛門の試算によると、対馬国絵図の海岸線延長は二一七里五町で、伊能測量より七里少なかつたといいます。誤差三%です。まずは精度です。狭い面積では丁寧に測れば当時の技術でもこのくらいにはまとめられたということでしよう。ただ、長大な日本列島ともなればそろは行きません。

天文観測と遠山の見通し確認を徹底しておこなつた伊能測量の出番でした。伊能隊は他の地域でも国絵図を参考にしていますが、対馬では参考にした国絵図の精度がよかつたためか、他と比べて約二倍の速さで測量作業が進行しています。

(渡辺)

最近の話題

アメリカ伊能大図ロケなど

タイムカプセルを埋設

伊能大図未発見部分二枚を歴博で確認

芳名録より

「玉の浦椿」通信

研究ノート

『官板実測日本地図』論考 (一)

伊能古文書教室 『家牒』 (三)

「割円八線対数表」の誤記

伊能家文書紹介 19 文化元年のこと

加賀藩天文暦学者 西村太冲 (一)

伊能忠敬の足跡を辿つて

源空寺に景保墓は二基あつた

地域史料紹介

対馬藩宗家文庫『測量御用記録』 (五)

伊能忠敬の江戸在住日記 (七)

報 告

その後の「伊能ウオーカー」

「伊能忠敬図書館」が開館しました

忠敬談話室だより

アメリカ伊能大図の里帰りに向けて

お知らせ 例会・総会案内

(入会案内・編集後記)

			渡辺 一郎	編集部
高木 崇世	芝 九	伊能 陽子	八	一
小島 一仁	一七	伊能 陽子	二	七
河崎 優代	二八	伊能 陽子	二	七
河島 悅子	三四	伊能 陽子	二	七
安藤 由紀子	二五	伊能 陽子	二	七
永野 達代	五二	伊能 陽子	二	七
中山 翠	三九	伊能 陽子	二	七
前田 幸子	四七	伊能 陽子	二	七
山本 公之	五六	伊能 陽子	二	七
編集部	六二	伊能 陽子	二	七
六四	六二	伊能 陽子	二	七

(題字は伊能忠敬の筆跡)



最近の話題

アメリカ伊能大図ロケなど

渡辺一郎

アメリカ・ロケはできないだろうか

二〇〇一年一〇月のことだったと思うが、日本テレビの「知つてゐるつもり」のプロダクションから連絡があつた。番組で十数年ぶりに伊能忠敬を取り上げることになったので、色々指導して欲しい。アメリカ大図を体育館にでも広げて撮影できないだろうか、という勇ましいお話をだつた。

そういうことはとても無理であること。お金を払つてもよいかから複製を入手したいという交渉を、国土地理院の委託をうけて、(財)日本地図センターがおこなつてゐるが、はかばかしい返事が得られていないこと、などを話す。

結局、何枚でもいいから地図を広げたいということになる。この番組の売り物にしたいので、是非にと頼まれる。こちらも乗り込んで、埠のあかぬ話の交渉したい気持もあり、共同通信社からも記者を出して追加撮影したいという要望を受けていたので、一挙解決のため、日本テレビの予算で出かけるか、という気持になる。

そうときめると、アメリカ議会図書館地図部長のエバール博士に、つぎのようなメールとFAXを送信した。

日本最大の商業放送が伊能図発見についてロケをしたい、博士のイ

ンタビューなどを撮りたいといつてはいる。これは一日で終了する。つぎに、日本の有名な通信社である共同通信社が前回私が撮影した部分以外の撮影をして報道したいといつてはいる。許可して欲しい。

私もアメリカ大図複製の入手とか、日本で考えている展示会について、あなたと話合いたいので、つきの日程で訪問したいが、都合を教えて下さい。

第一日 展覧会のための地図借用と複製入手の打合せ

第一日 日本テレビの撮影

第二日 共同通信社の写真撮影

ところが、これまた返事がない。出発準備に日数が必要であるし、予定ぎりぎりになつたので、在米の民放コードネータに、渡辺の代理として直接電話交渉するよう指示する。

Mr. Watanabe の希望は承知している。マスコミの話なので広報を含め打合せ中だという。そこで、コードネータは広報にも直接電話して交渉し、地図の状態が非常に悪いので公開し難いが二・三枚ならOKと返事が出る。二・三枚では話にならないので、さらにブツシューして五枚撮らせて貰う許可をいただいた。

エベール博士とのアポイント成立

訪問が了解されたので、我々は訪米日程を確定し、航空券、ホテルを手配。共同通信社の秋元写真部長にも連絡してワシントンの写真記者に指示していただき。国土地理院堀野測図部長にもアボが取れたので出かけて交渉する旨連絡する。そして、日本地図センターからもデーラ入手などの交渉のため、通訳をかね六月の調査に一緒に出かけた永井理事が同行してくれることになる。

いっぽう、アメリカ側では、われわれを迎えるにあたつて、マスコミ対応を含めた基本方針をきめるため、保存、広報、閲覧など関係部署で協議を始めたらしい。保存部門は地図の状態が悪いからと今回の公開に反対する。

今回のあと、他の新聞・テレビが希望した場合、A社に公開し、B社に見せないということはできないとか、修理して複製を作り、それを見せるべきだとか、いろいろな意見が出たが、第一回の会議では結論が出なかつたという。コードネータは連日催促し、模様は逐一 FXで私に流れてきたが、進展は見られなかつた。

そのあと、もう一度会議があつて、終了後、博士からコードネータに電話がある。「申し訳ないが、前回のOKはキャンセルする。原図を修理し完全な複製品ができるから、複製品を公開することになった」「地図を疊んだ外観とかエベール博士のインタビューはよいが、中を開いて見せるることはできない」との返事である。

愕然とする。これでは、TVが出かける意味がない。押し返すため、渡辺から「撮影は今後にする。あとは日本国内の希望には伊能忠敬研究会の写真で応対するから、今回に限つて許可して欲しい」と要請文をメールし英訳して交渉してもらつたが、決定だから的一点張りだつた。「複製の制作はいつになるのか」「かなり先だろう」「それでも本物は見せられない」と埒があかない。

仕切り直し

そこで私は、マスコミには見せなくとも話しだけはできるので、「ここまで來た以上は…」というような気持で申し訳ないが、共同通信社

議会図書館地図部長 エベール博士のオフィス



の秋元写真部長との約束を取り下げ、国土地理院にスポンサになつてもらつて、現物借用と複製入手交渉を目的に、ワシントン訪問を決意する。すると、民放側も発見者である私の押しかけ訪米を聞いて、建前はそれとして、現地交渉に万一を期待し、たとえ開けなくとも、とロケ強行をきめ、現地スタッフを手配する。

当日に逆転劇

そして訪問当日。エベール博士から第一日目に予想外の良いお返事があり、複製データの入手と展示のための借用についてほぼ内諾をいたぐことができた。詳細は、受け入れ体制をかためつたる段階なので、述べることができないが、大図発見と同じくらいビツクリした。

翌日のTV撮影では、見せないといつて大図数枚を、書庫のかで、地図を持ち出すところから、広げて眺めながらコメントする場面まで撮影させてくれた。

上機嫌でインタビューにも応じ、私の名前を乱発していた。

写真撮影については、初日の打合せでは了解が得られず、希望リストを見せただけであった。しかし、テレビが引き揚げたあと、第三日には、私に十数枚の写真撮影が認められ、お蔭で共同通信社への約束も果たすことができた。朝出勤すると、希望した部分が閲覧台に積み上げてあつた。同行した永井理事（国土地理院元部長）に地図の出し入れをお願いしお世話になつたが、地図の折りたたみに、スーパーバイザーは付き切りで、たいへん慎重だつたが。

これら一連の変化について「どうなつてているの？」コーデネータも民放さんも、予想外のよい結果に、昨夜、渡辺さん、何かしたの？ といふようなことだった。

私の推測では

いろいろ考えてみると、夏の調査のときにも借用を申し入れたが、エベル部長は現物の貸し出しには強く反対していた。また今回の、第三日には在アメリカの日本人修復業者を呼んでおり、私と必要時期などについて打合せをするよう指示されたが、業者は本物を貸し出すことを知らなかつた。一ヶ月前には本物は貸さないといわれていたという。おそらくは、第二回の会議のあと、これまでに私から送つてあつた、日本の全国紙や主要地方紙の記事、渡辺が数年前にNHKラジオで忠敬についておこなつた国際放送原稿などを、図書館トップに見せて方針決定を求めるのではないか。新聞発表以降見学者もあり、写真のリクエストもあつたようである。

トップダウンで「日本でそれだけ反応があり、展示会をやりたいというなら、キチント複製を作つたうえで、貸してやつたらどうだ」という結論になつたのではないかとおもう。

貸す以上は完全な複製を作らねばならないという話は、前にも聞いているが、予算の関係もあつたと思われる。今回、今後の方針を明言していたから、関係部署をふくめスッキリ方針が出たものと推察する。その方向が担当者の意志が働いたと推測する。当日の突然OKは部長のサービスだったろう。とすれば、日本側としては中途半端な対応は許されないと考えている。

視聴率は一一・一%、五〇台の女性が多く見る

ことは始めるときは知らなかつたのですが、あとで聞かされました。

視聴率は、昔は二〇%を越えたこともあるそうですが、最近は一〇%前後だそうです。伊能忠敬は一一・一%でいいほうでした。

制作方針は事実の記録を集め、これをドラマで再現するやりかたで、比較的忠実に歴史をなぞつてきます。

私の本を参考にしたといながら、稿本では満年齢と数え年の混在とか、年代の逆転、誇張のやり過ぎがかなりあつて、一月になつてから随分直しました。

それでも一ヶ所ばかり、勘弁して欲しいという、おかしい場所が残つてしましました。視聴者をひきつけるための誇張です。視聴率は時々刻々に変わります。面白くなくなると、カチヤツト変えられるのだろうです。

しかし、今までのテレビ・映画・演劇のなかでは一番よく事実を追つていたと思います。忠敬の全体がよく分つたという二意見をたくさんいただきました。

意外だったのは、忠敬は男性物とばかり思つていたのですが、この番組を五〇台の女性が多く見ていたそうです。子育てを終り、残る自分の人生で何かにチャレンジということかな、とうれしく思つています。

第三日に撮影した写真は、一月六日（日）より公開OKの記事をつけて、四日に共同通信から配信されました。六日朝刊では、日本経済新聞、産経新聞をはじめとして、地方も含め二一紙で大きく記事掲載されました。新潟日報では広告無しの両面見開きのカラー一頁の特集を組んでいるのが目立ちました。地方紙の忠敬への関心が注目されます。

番組は一月二七日に放映されました。この番組が三月で終るという

日本料理店で懇談のあと、エベール博士と記念撮影
(ジョージタウンの「酒処 まこと」にて)



北海道ニシベツにもロケ

ところで、もうひとつ日本テレビで伊能忠敬の番組作りが進行中です。こちらは「知つてゐるつもり」のように事実を挙げたあと、ドラマでイメージを伝えるという手法ではなく、全て現地ロケのドキュメント番組だそうです。

たいへんだと思いますが、系列の札幌放送の担当で、半年かけて撮りためるそうです。放送は六月で深夜番組ですが視聴率は高いとのことです。佐原、源空寺、忠敬像除幕式、吳の海岸で忠敬が絶景と誉めた場所、などを撮つたといいます。

それなら、屋久島に碑が立つたのだし、伊能測量線最北端のニシベツは、と話していたら本決まりになつて、一二月一九日、アメリカから帰るとすぐ、ニシベツまでお付き合いしました。

中標津空港に降りると、カメラが待つていて、ゲートから撮り始めます。こりや運動選手か、芸能人なみかと、照れくさいが、先方は仕事だから当たり前。撮り終つて挨拶。

別海町の郷土資料館で学芸員の石渡さん、郷土史家で文化財保護審議会委員の吉川さんが待つてました。伊能隊が宿泊したのは何処かということがまずテーマである。

測量日記をたどりながら、地図の上に予想ルートを記入してゆく。昔からニシベツ川をはさんで南側はニシベツ、北側はベツカイといつてゐる。伊能隊はニシベツといつてゐるから、ニシベツ川の南側に泊まつたと地元の人は思つてゐることだつた。古い絵図によるところ、ニシベツには鮭の作業場と客屋はあつたが人は住んでいなかつた。町はベツカイ側にあつたといふ。

ところが、持参したアメリカ伊能大図では天測地を示す星印はベツ

カイ側にあつたから問題となる。天測地を示す星印は東京国立博物館の伊能中図ではなく、成田山仏教図書館の中図には☆があるが、すべての天測地を書いたものではないらしく、ニシベツにもベツカイにも印はない。アメリカ大図はベツカイに☆があつたので、動かぬ証拠となつた。

それにしても、この地域の海岸線は間宮林蔵が測つており、忠敬は導線測量をしていないから、場合によつては間宮が天測した印の可能性が残る。しかし、測量日記に夜、天測したと書いてあるのだから、忠敬の天測地点としてもよいのではないかと割り切ることにする。

そして現場に出かけ、ニシベツ川河口のベツカイ側に立つ。零下四度。東京の冬支度では全然間に合わない。厚いコート、分厚い長靴、手袋を借りて出かけたが、風があつて車から出るとすごく寒い。

テレビカメラは、討議中も、車から降りて案内してもらつて、間も廻り続ける。河口の向きは伊能図とは違つていた。砂州のでき具合は年とともに変わるし、戦後にも入り口を塞いでいる砂州を掘削したというから、ありうることだろう。

吉川さんは、これから運動して記念碑を建てたいといつ。泊まつた場所は分らないが、位置はベツカイ側とし、天測地と推定される河口でもいいが、道路から離れているし、人通りの多い「別海発祥の地の碑」あたりではどうかとのこと。目立たない場所につくつても仕方ないでの、この辺ということで、いいのではないかと賛成する。

忠敬は近くの風連川を船で下り、風連湖を渡つて海岸に出たといつから、湖の全景を見渡せる場所を探して車を走らせる。走古丹までいつたが、あまりに観光地的で全景を俯瞰できなかつた。湖岸でもつと

も車で近寄れる場所から遠望を撮る。忠敬が渡つた場所は遙か彼方の感じであつた。

風連湖は冬は凍結し車が通れるという。氷上に火を焚いて野宿し「わかさぎ」を釣るのだそうである。また、河口から二・三百メートル離れば鮭を釣つてもよく、漁期にはたくさんの釣り客の車が各地から集まるそうである。鮭釣りなど豪快なお話を聞いた。

映画「伊能忠敬」に出てくる献上鮭は今でも作つており、手間をかけ高価なそうである。一本いたいたが、普通の新巻とはちがつて、たいへん美味しい。

町長に挨拶をというので、昨年新築したという豪華な役場にお寄りして、忠敬の話をして、記念碑などどうですかと水を向ける。考えましようということだった。テレビが廻つていてから、あまり渋いこともいえなかつたとおもうが、隣に吉川さんもいたから、大丈夫ではないかと思つていて。

このテレビは全国放送に先がけて、北海道部分だけを、一五分くらい、札幌テレビから報道番組として流され、北海道内だけですが、聴率は最高一九・二%とれたと連絡がありました。新人アシスタントデレクタ・遊佐さんが、レポーターをしたりアナウンサをしたり、大活躍でした。初心恐るべし。

昭和二六年二月十九日大雪風嚴

寒指頭凍渋 咸末 塩谷 溫

温故知新

揮觀東河先生地図検書

昌平坂於玉ヶ池塙検校宅等
不勝感慨附記為念

昭和廿六年二月十九日大雪風嚴
寒指頭凍渋 咸末 塩谷 溫

温故知新

輝觀東河先生地図検出

昌平坂於玉ヶ池塙検校宅等
不勝感慨附記為念

しおのや おん（一八七八—一九四九）

大正・昭和期の中国文学者。塩谷岩陰の弟塩谷誠（簫山）の孫。塩谷時敏（青山）の子。号を節山。東大教授となり、中國・ドイツに留学した。中国の俗語文学「全相平話」や「三言二拍」の発見が知られる。（三省堂コンサイス人名辞典）

末戚（遠縁の者、親戚の末座に連なる者）とあるように、伊能七家の一つ、茂左衛門家現当主の大伯母が温氏に嫁いでいる。また、佐原の諏訪公園忠敬銅像台座に刻まれた文字は父の塩谷青山の揮毫による。

塩谷温著「新字鑑」は、昭和十四年発行の漢和辞典であるが、かなり使い古されながら我が家では未だに活躍している。最近まで気がつかなかつたが、この辞典の扉頁にも、時の内閣総理大臣近衛文麿の筆で「温故知新」と書かれていた。

伊能 陽子

タイムカプセルを埋設

開く時期は後世にゆだねる

春の香りがただよう三月十二日は、午後四時から富岡八幡宮の伊能忠敬銅像横で、昨年完成をみた銅像建立を記念したタイムカプセルが埋設された。制作者の酒井道久氏をはじめ伊能ご夫妻、関係諸団体役員、富岡八幡宮司の列席のもと、本殿にて「タイムカプセル埋納奉告祭」が行われた。参加者は「おに衣」で装いを正し、おはらい、おきよめ、のりと奏上、玉串奏上など儀式が厳かに執り行われた。このタイムカプセルは直径三十七cmほどの円盤で厚みは十五cmほど。鍋を二枚合わせた形。淨財を頂いた方のお名前が銅像裏面には納まらないため、カプセルに入れて記録を残すもの。伊能忠敬研究会からは「銅像建立報告書」が、日本ウォーキング協会からは「伊能ウォーカー全記録」など関係団体からそれぞれに埋蔵物が入れられ、銅像左奥に埋設された。その後開催された伊能忠敬銅像建立実行委員会では、タイムカプセルをいつ開けるかについての議論がでた。三十年、五十年、百年という区切りや、ここにいるメンバーで一番若い方が証人になれる時間、十年、二十年などがよいなど。委員各位の積年の知恵から時の流れを待とうということになる。日付は定めない。後世にまかせようというのが結論になった。従いここにその記録を残しておくことにしよう。

なお、銅像周辺は龍のひげの植栽があるが、銅像の前で写真を撮る人が増え、だいぶ傷んできている。また銅像を管理する富岡八幡宮にとっても、像の毀損を防ぐためにもということで、酒井先生の指導のもとに銅像まわりの整備が進められる予定。またウォーキング協会では銅像説明パンフレット「伊能忠敬と三等三角点」を作成し、銅像PRに使用される。

(編集部)



タイムカプセル埋設式 2002年3月12日

『官板実測日本地図』論考（二）

—その編纂過程と図の内容・種類—

高木 崇世 芝

五 官板実測図の内容

官板実測図は、伊能忠敬の『大日本沿海輿地全図』の内の小図三枚（縮尺四十三万二千分の一）に基づくものであるが、その時、使用された伊能図（小図）の所在は不明である。また、現存する小図も極めて少ないので、判明している図を紹介する（注15）。

〔伊能図（小図）の現存〕

- ① 蝦夷地・東日本・西日本の全三枚（イギリス海軍水路部所蔵）
- ② 東日本・西日本の二枚（東京都立中央図書館所蔵）
- ③ 蝦夷地・西日本の一枚（神戸市立博物館所蔵）
- ④ 蝦夷地の一枚（東京都・阿部正道氏所蔵）

刊行された官板実測図（全四枚）の内容は次のようなものである。

題簽は黄色の紙製で、図名は『官板実測日本地図』。題簽中の下部にそれぞれの地域名を記載する。表紙は薄茶色の絹装で、その寸法は縦三三・二四・横二一・二四cmである。地図は木版で水色と灰色の二色摺である。経度は京都を基点として「中度」と記し、図は四枚共に南を上部として描写する。出版年や発行所などを記す刊記はないが四枚共に図面の隅に「開成所刊行」と記す小型朱印がある。櫻井豪人氏によれば、この小型朱印はほぼ慶應元年以前の開成所刊行物に捺されてい

るという（注16）。各図について記す。

第一 題簽『官板実測日本地図 級内 東海 東山 北陸』

紙面 縦二二八・五cm、横一五九・六cm

東日本全域を描写する。凡例があつて十一の記号を記す。別枠内に「小笠原群島総図」があるが、これは伊能図にはない図である。

第二 題簽『官板実測日本地図 山陰 山陽 南海 西海』

紙面 縦一九四・三cm、横一四三・六cm

西日本全域を描写する。南方は、屋久島・種子島・諏訪瀬島までを描写し、「朝鮮」の山名も記す。別枠内には「琉球諸島総図」を載せるが、これも伊能図にはない図である。

第三 題簽『官板実測日本地図 蝦夷諸島』

紙面 縦一五七・〇cm、横二〇一・〇cm

蝦夷地全島を中心に周辺の島々、北蝦夷（カラフト島）の南端、クナシリ島とエトロフ島、そして色丹島・歯舞諸島を描写する。

この図が伊能図と大きく異なる事は、すでに知られている通りであるが、それを具体的に箇条書きしてみる。

〔伊能図〕

- | | | |
|---------------------------|------------|-------------|
| ○クナシリ島 | ・西南部のみ実測描写 | ・全島描写する |
| ○エトロフ島 | ・描写なし | ・全島描写する |
| ○色丹島・歯舞諸島 | ・色丹島のみ遠望描写 | ・全島描写する |
| ○小島・大島・ヲクシリ島・リイシリ島・レフンシリ島 | ・遠望として描写する | ・平面図として描写する |

○蝦夷地本島 箱館・恵山・鷺の木・知床半島北東部

・未測量のまま
・実線で描写する

○蝦夷地本島内陸部・石狩低地等三本の道と・全内陸に山地・

遠望の七山を描写する
河川・沼を描写

この中で蝦夷地内陸部の描写が、どんな資料に基づいたものか検討してみたい。
編纂に關わる文書の中に「前田健助取調」「箱館奉行取調候絵図」という文言が幾度も出てきた。

前田健助とは通称で、名を夏蔭といい、幕臣で国学者であつた人物である。安政元年、幕命によつて『蝦夷東西考証』を著し、同三年には、目賀田帶刀等と共に蝦夷地に赴き二年間にわたつて蝦夷地・カラフト島を踏査した。この調査によつて『蝦夷新定地名考』や『蝦夷地名真字相定候ニ付奉伺候書付』などを提出している。健助の主張は、アイヌ語地名による片仮名でなく、漢字の地名にすべきというものであつたから、開成所にとつて好都合だつたはずである。「箱館奉行取調候絵図」は確定できないが、もし蝦夷地全島図であれば、松浦武四郎が出版した『東西蝦夷山川地理取調図』(全二十八枚) (以下、取調図と略称する) だらうと推測される。松浦武四郎は安政二年暮、箱館奉行雇となり、翌三年から五年までの三年間にわたつて蝦夷地・カラフト島を調査し、詳細な記録や報告書を幕府に提出している。そして、箱館奉行の許しを得て安政六年に出版したのが取調図である。この図は内陸部までも詳細に描写され、当時の蝦夷図でこれほどの精密な図は他にはない。また、蝦夷地全体の輪郭は伊能図(中図)を採用したものであるからいつそう好都合であつたろう。実際に官版実測図と取調図の内陸部を比較してみると殆ど共通するのである。

第四 題簽『官版実測日本地図 北蝦夷』

紙面 縦二〇五・三cm、横八三・五cm

本図は伊能図には含まれず、地形の相違や国境着色などで最後まで問題となつた一枚であるが、當時としては極めて正確なカラフト島図である。地名の記入については南部が詳しく、西海岸は北部へ進むにつれて少なくなる。東海岸は北シレトコ岬から北端までに僅か四つの地名より見られない。

当時、作製されていたカラフト島図として次のようないつがある。

○北蝦夷地之図

嘉永七年 村垣淡路守・堀織部正一行の作製図 (注17)

東京大学史料編纂所など所蔵

○北延叙歴検真図縮写

安政六年頃 目賀田帶刀作製図

国立国会図書館所蔵

○北蝦夷山川地理取調図 (全十九枚)

安政七年 松浦武四郎作製図

国立公文書館所蔵

○唐太島絵図

幕末作製図

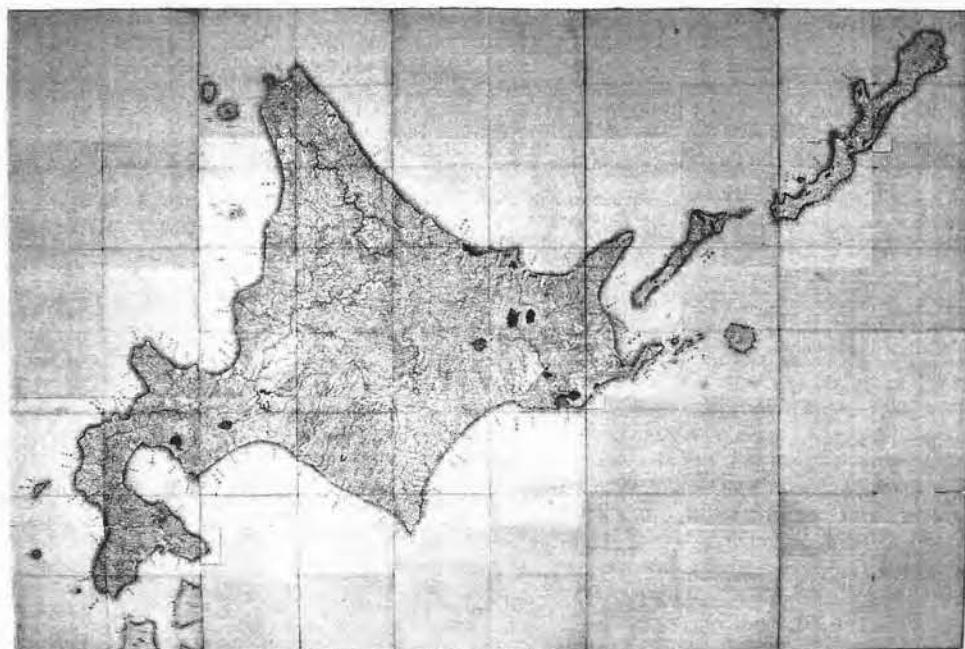
国立公文書館所蔵

○北蝦夷図 (仮称)

幕末作製図

北海道大学附属図書館所蔵

恐らくこの中のいずれかの図が参考とされたに相違ないだらうし、先の文書にも見られたようにロシア作製図も参照されたようである。



東西蝦夷山川地理取調図 安政六年刊 松浦武四郎作

六 初版と再版の相違

ここで、あらためて初版と再版の相違を比較しておく。繁雑をさけて箇条書きで記す。

「初版」

- ①出版年月 慶応元年（推定）
②表紙 薄茶色絹装
③題簽 黄色紙
④朱印 小型朱印「開成所刊行」
*四枚共に捺す



初版印

2.1 × 0.6
(Cm)

「再版」

- 慶応四年閏四月
草色布装
白色紙
大型朱印「開成所刊行」
*第一図のみに捺す

再版印



5.7 × 2.1
(Cm)

⑤木箱

出版当時の木箱の現存は少ないようと思われる。筆者は今までに、僅か三箱を実見したにすぎない。初版の箱は、東京大学総合研究博物館（山崎文庫、題簽文字欠）所蔵のものを、再版の箱は、札幌市の個人所蔵から計測した。

題簽の寸法は、いずれも縦二六・二cm、横六・三cmである。

〔初版用〕



〔再版用〕



の総数は五十枚であり、その半分位の大きさのものは約六枚、周囲の経緯度目盛り部分のみの版木も入れるとさらにその数は増えることになる。

秋岡武次郎氏によれば、この版木を彫った人物は、版木師の宮田六左衛門（九代目）であるという（注1）。六左衛門は、文化十一年（一八一四）に生まれ、はじめ常次郎といったが後に名を之行と改め九代目を継いだ。明治六年（一八七三）、文部省に入り多くの版木を彫つたが、同年、六十四歳で没したという（注1）。

官板実測図の版木が彫刻されるのは元治元年（一八六四）前後であるから、六左衛門の五十歳頃ということになる。

その版木は筆者の調査では、東京大学総合研究博物館と市立函館図書館に所蔵される。前者は昭和十一年代に六左衛門の子孫の方が、東京大学理学部地理学教室に寄贈したものだそうで、三枚三面がある。後者は入手経路もその年代も不明であるが、九枚十二面がある。版木はいずれも桜材と思われるが、大きさは、ほぼ縦六十四cm、横四十五cmであり、片面だけ彫つてあるものと両面に彫つてあるものがある。

〔東京大学総合研究博物館所蔵〕

○遠江国御前崎から渥美半島、志摩半島付近
○豊後国から日向国、大隅半島付近

○種子島と琉球の宮古島・石垣島・入表島（現西表島）付近
〔市立函館図書館所蔵〕

○越後国出雲崎付近から酒田付近までと猪苗代湖付近

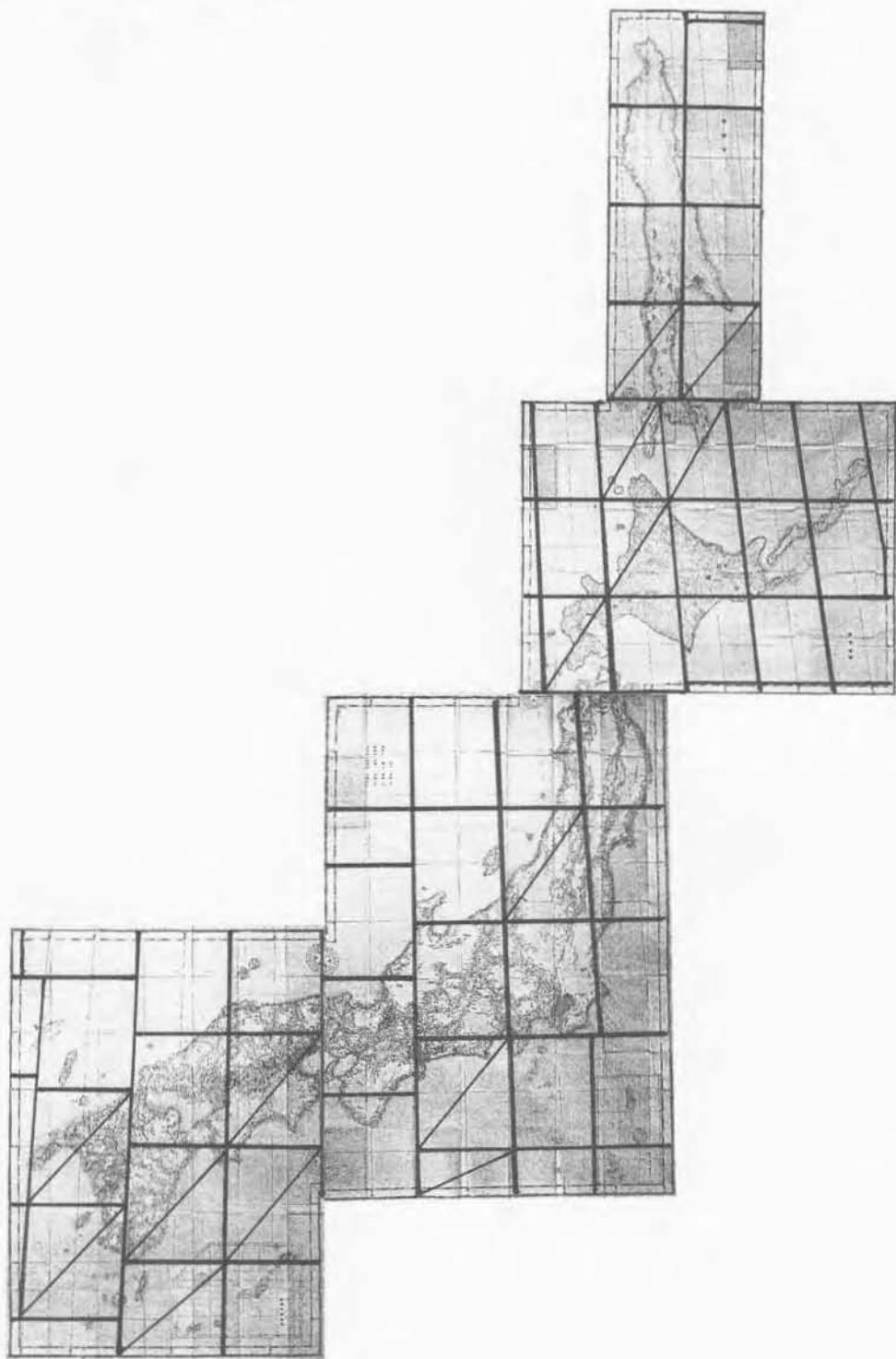
木版摺には版木が必要である。江戸初期から明治十年代頃までの長い間、印刷物のほとんどは木版摺であった。官板実測図にはどれほどの版木が使用されたのであろうか。それは基本的に経度二度分、緯度一度分の範囲を一枚の版木に彫るようになつてることから、図面の貼られた枚数で判明する。この範囲の版木

七 版木の作製とその現存

木版摺には版木が必要である。

江戸初期から明治十年代頃までの長い間、印刷物のほとんどは木版摺であった。

官板実測図にはどれほどの版木が使用されたのであろうか。それは基本的に経度二度分、緯度一度分の範囲を一枚の版木に彫るようになつてることから、図面の貼られた枚数で判明する。この範囲の版木



官板実測図の版木の様子(斜線部分が現存するもの)

- 壱岐島から五島列島、長崎、天草諸島付近
- 薩摩半島から屋久島付近、甑島列島
- シリヘツ・熊石・松前・箱館・モロラン(現室蘭)と下北半島
- 石狩川・マシケ・テシホ付近、テウレ島・ヤンケ島
- ソウヤ付近、リイシリ・レブンシリ、北蝦夷島南端西側半島
- 北蝦夷島(北緯四十七度から四十九度)東側部分
- 北蝦夷島(北緯四十七度から四十九度)西側部分

大 学 南 校 印



4.3 × 4.3 (Cm)

この大学南校版は、開成所版と同じ版木を使用しているのであるから三版ということができる。この三版は、四枚共に開成所再版と異なる部分がない。ところがその後に出た四版で大きな修正が行われる。それは次のようなことである。

①初版から三版までの図には、北蝦夷図を除いた三枚に、山岳・島・岬・湾の周囲に方位を示す「子四分・酉八分半・亥五分」などの文字が円状に記載されていたがこれが全て削除される。

②第三・蝦夷諸島図にあつた「クナシリ・エトロフ」の文字が削除される。

③第四・北蝦夷図にあつた「北蝦夷」の文字が削除される。これによつて、この三文字は初版で南を上に記載され、再版で北を上に書き直され、四版でついに姿を消すのである。この図の出版に糸余曲折があつたように、「北蝦夷」の三文字にも、いろいろな思惑があつたのであろうか。

さて、その体裁であるが、表紙は鮮やかな青藍色の布装であり、四枚共に図面の隅に朱印「大学南校」が捺されている。

「大学南校版」をまとめると次のようになる。

三版 出版年月 明治三年(推定)

表紙青藍色布装 題簽黄色紙

*朱印「大学南校」あり。図は開成所再版と同一。

四版 出版年月 不詳

表紙黄色紙装 題簽白色紙

*方位を表す文字と「クナシリ・エトロフ・北蝦夷」の文字が削除される。朱印なし。

五版 出版年月 不詳

表紙黒色紙装 題簽白色紙

*図は四版に同じ。朱印なし。

四版と五版の図を比較しても異なる部分が見当らず、どちらが先行かの判断は困難なのだが、文字の汚れやかすれの多いほうをとりあげ五版とした。なお大学南校版の木箱の有無については不詳である。

(つづく)

伊能忠敬が制作した日本地図は、大図二百十四枚、中図八枚、小図三枚からなっています。中図八枚と小図三枚は国内に写しが伝存することを確認していますが、大図写しは国内各地のものを合わせて約六十枚余りしか分かりませんでした。

昨年、アメリカ議会図書館に大量二百七枚の写本の存在が確認され大ニュースとなりましたが、このほど、国土地理院・根本氏の発案で、国立歴史民俗博物館、国土地理院、日本国際地図学会、伊能忠敬研究会で合同調査をおこない、アメリカ大図の未発見部分七枚のうち一枚は、同博物館に収蔵されている伊能大図であることがわかり、三月十一日佐倉市の同博物館で報道発表されました。

当図は大図写し二枚の現物が展示され、翌日より四週間の予定で一般公開されました。夜のNHK首都圏ニュースではきれいな地図の映像が放送されていました。

新聞の内容は次頁の北海道新聞写しをご覧下さい。 (編集部)

説明者 (敬称略)

堀野 正勝 (日本国際地図学会会員・国土地理院測図部長)
根本 寿男 (日本国際地図学会会員・国土地理院)

「開成所刊行」の朱印と「開成所刊行物」による

注 16 『大日本古文書・幕末外国関係文書之人』に掲載される
注 17 『伊能忠敬作成の日本諸地図の現存するものの若干』による
注 18 『字彙り版木師・木村嘉平とその刻本』による

青山 宏夫 (国際歴史民族博物館)
渡辺 一郎 (日本国際地図学会会員・伊能忠敬研究会代表理事)
鈴木 純子 (日本国際地図学会会員・相模女子大講師)

伊能大図未発見部分一枚を歴博で確認

不明の伊能忠敬「大図」2枚発見

「松山と奥尻」分

国立民俗博物館が収蔵

江戸時代後期の測量

家、伊能忠敬（一七四五

一一八八年）が作った

日本地図のうち、米国議

会図書館で昨年発見され

た「大図」（縮尺三万六

千分の一）と呼ばれる地

図の写しと同じ版の未発

見分一枚が、千葉県佐倉

市の国立歴史民俗博物館

に収蔵されていたことが

十一日、国土地理院など

の海岸部と奥尻島の遠景

が描かれている

同館が文化庁を通して

故・秋岡武次郎元法政大

名譽教授から譲り受けた

（第七軍管北海道之図）

の第三十四号「江差（江

差）」と第三十五号「奥

尻島遠景」（旧陸軍陸地

測量部が一八七六年（明

治九年）に忠敬の地図を

写したものとみられる。

第三十四号は縦約一

尺、横約一・九尺。松山

管内大成町久遠から同管

内上ノ国町小砂子までの

海岸部を描いている。山

地や集落などの手書きに

よる彩色や表紙の記載、

さらに鉛筆書きの五ヶ方

眼が図全体に施されている。

二枚の地図は十二日か

た地図と同じだ。第三十

五号は縦約一尺、横約一

般公開される。

・一尺。海岸線は描かれ

ず、左下に小さくある島

に「ヲコシリ島」と記さ

れている。

大図は百十四枚に日

本全手を分割しており、

これまで国内に写しがあ

るところは約六

十枚。昨年、米国で二百

七枚が発見され

た。

大図は百十四枚に日

本全手を分割しており、

これまで国内に写しがあ

るところは約六

十枚。昨年、米国で二百

七枚が発見され

『家牒』 (二)

小島一仁

続いて、妻まつに関する記載があるが、そのあとの記述を、簡単に項目的に整理して記すと次のようになる。

六代目景利

今回は六代目の伊能景利について記す順序となつたが、私は、景利の人物・業績・忠敬への影響等について、以前に何度か書いたことがある。

「伊能忠敬と伊能景利」(『千葉教育』一八九号所収・一九七二年)

『伊能忠敬』(三省堂・一九七八年)

『佐原市史資料篇別篇一・部冊帳前巻』の「解説」(一九九六年)

等がおもなものであるが、景利についてくわしく知りたい人は、それらを参照していただきたい。

『家牒』の景利に関する記述は比較的簡略であるが、ここでは、その記述にそつてベンをすすめたいと思う。
景利についての書き出しは、型の如く、次のようになつている。

享保十一年五月廿七日、伊能勘解由病氣ニ付、觀福寺隠居相招
授戒を請、剃髪ス、六月廿七日死去ス、
行年五十九才
法号真言院如宝研忍居士

とあつて本文は終る。だが、そのあとに、細字で、景利の人柄と功績をたたえる文章が記されているので、次に、それを原文で掲げることにする。

六代目伊能三郎右衛門景利、初名喜太郎・若名直右衛門・後号勘解由、法号真言院如宝研忍居士、享保十一年六月廿八日死ス、行年五十九才

△解説文

但勘解由^{其事}私領御料役儀相勤、潔白^ニ西村方為を相考、外
名主共申合丹誠を致し候儀は、部冊前後二十四冊年々日帳^井
記録等^ニ詳付略之、元來生質忍柔^ニ專ニ謙讓を貴ひ、内ニ方直
之志を抱き、組内御年貢差貢割合^井寄合之節は、先祖^{より}紙筆
墨燈油食事等迄自分^而賄來り、事精密を崇ひ聊之算違有之
候而も半夜ニ及とも幾度も調整し至当^ニ及て止^{昌黎五事由も又ニ不}
常々百姓之事を果決し賞罰を明^ニし、其身謙遜^ニし己を不立、村内
小前為を心掛、先祖^{より}世々恵来りしといへとも能困窮を憐御年貢調
兼候ものを償、漬百姓不出来様取計、祖父宗惠^{より}始置し記録
精實に相考、村内古記録或ハ隣村之古家^ニ問探り田地疆界土地之起
縁、先年^{より}公儀之御觸御用向は勿論村里記録^ト可成事を集成し一部
記録となし、其外不依何事後世之勘考^ニ可成先年^{より}新々田割地
二家法曆年之日記迄筆記し、平生仏神を崇諸国循拝し伊勢参
宮せし事數多、西國坂東秩父親音^{より}巡拝し湯殿山^江三度四國辺路シ
或^ニ經典書写し是を神社仏龕^江奉納ス、父之業を守り在々御地頭方
在嶋小前貸致し、酒造村々運送^井江戸廻し米商売等渡世、既^ニ深川
大嶋町^ニ地所求旅宿を構ひ醉を造り其以後^ニ止、後年^ニ至^リ不仕合
始^ニ劣れり、病中子孫之可成心得儀を病家之寂莫と稱し、死去之節
定書迄記し遣戒^ニ及へり

在嶋小前貸致し、酒造村々運送^井江戸廻し米商売等渡世、既^ニ深川
大嶋町^ニ地所求旅宿を構ひ醉を造り其以後^ニ止、後年^ニ至^リ不仕合
始^ニ劣れり、病中子孫之可成心得儀を病家之寂莫と稱し、死去之節
定書迄記し遣戒^ニ及へり

景利の業績

景利は村務とかかわって、大きな業績を残したが、その一つに村絵図を作製して、幕府の元禄期の国絵図作製を手伝つたことをあげてよいであろう。元禄十年（一六九七）六月、江戸幕府は諸大名に対して国絵図の作製を命じたが、これにもとづいて、翌年一月、地頭所天方氏から名主の景利に、佐原村絵図をつくつて提出するようにとの指示があつた。景利は、すぐさま、数人の百姓たちに手伝わせて、佐原全村の実測を行つて、短時日のうちに村絵図をつくつて地頭所に提出した。このときのことは景利自身が編集・記録した『部冊帳』に、かなり具体的に記されているが、どうしたわけか、『家牒』にも、もう一つの先祖書である「伊能家系年譜」（『旗門金鏡類録』所収）にも全く記されていない。

景利のもう一つの業績に川除普請のことがある。これについては、さきに示したように『家牒』の本文にも記されているが、あまりに簡単すぎる所以で、少し説明を加えることにしよう。

宝永元年（一七〇四）、関東筋河川の大洪水により、各地の堤防が決壊した。そのため、翌年幕府は大規模な川除普請を計画・実施した。この時、景利は、「新島領組合五ヶ村新田御普請所」の工事を、金五七五両余（永五百七十五貫百十文）を投じて落札し、工事を成功させるとともに、凶作に苦しむ農民たちをこの普請に傭つて生活を凌がせたのである。この川除普請の経緯については、『部冊帳』の中に景利自身が詳しく記している。

だが、景利には、もう一つの大きな業績がある。それは、前に掲げた『家牒』の細字書きの部分にも記されているように、大量でしかも整然と編集・筆写した記録を残したことである。そのことは、まことに驚異的なものなので、やはり、少し具体的に述べておきたい。

景利の残した記録の中で白眉とされているものに、『部冊帳』前巻三冊（天正年間—正徳四）・後巻一四冊（正徳五—享保一〇）がある。この記録は、佐原村とその近隣諸村についての編年覚書で、内容は、利根川水運・新田開発・土地関係・市・網代場等多岐にわたる。その他、『伊能景利日記』二〇冊（元禄一〇—享保一〇）や、神・仏・儒学・年中定書等に関する記述を種々の書籍から筆写し、私見も加えて編集した生活指導書ともいべき『千代古見知』七冊（享保六）・『続千代古見知』九冊（享保六）等は、『部冊帳』と並んで景利の編集筆写した記録のうちの代表的なものである。しかし、景利の残した記録は、もちろん、それだけではない。右のほかに数十冊を数え、しかもすべてがきちんと整つたものであつて、常人では、ほとんど実現不可能とさえ思われるほどなのである。

景利が、このような記録のしごとにたずきわつた動機は、元禄二年（一六八九）、一二歳のとき、祖父景善が書き残した根郷五ヶ村（岩ヶ崎・佐原・篠原・津宮・大倉）と北方の新島領の村々との土地争いに関する未完の記録に触れて感動したことによるものであつたようである。そして、彼は、このときから死去する前年の五八歳まで、三六年間にわたつて記録のしごとを続けたのであるが、特に注目されねばならぬのは、それらの記録の大部分が、正徳三年（一七一三）、四六歳で隠居してから後の一二年間にまとめられていることであろう。景利は、隠居後、村務からも家業からも解放されて、この大しごとをなしとげることができたのであるが、このことは、後に、忠敬が隠居後に、あの大業績を達成したことの伏線と考えてもよいのではあるまいか。

病家寂莫

前に掲げた細字の文章の最後の行に「病家之寂莫」という文字が見える。これは、「ひょうかのつれづれ」と読む。景利が、晩年、病中の身で記した墨付紙に五枚ほどの記録のタイトルであるが、

病中、子孫之心得と成る可き儀を、病家之寂莫と称し、死去の節定書迄記し遣戒^二及へリ

とあるように、子孫への「遣戒」として記したものである。幸い、この記録の原本は、今も伊能家に伝えられているので、ここに、その「序」を掲げることにする。景利の自筆なので、その文字の書き方や文章から、すべての事に丹念であった景利の人柄や、晩年に於けるその思想の一端をうかがうこともできるであろう。

最後に記されている「退休軒松永」というのは景利の号である。彼の署名には、このほかに、諱の「景利」、隠居後の通称「勘解由」、法号の「研忍」などが用いられている。

病家寂莫

序

人間六十年の樂しみと云ひハ行年六九に到り、然るに古年の中春より今におゆて心身常ならず、林下の静を用ひて多くの月日を病家に籠ひ、寂莫が私の夜長く

（解説文）

病家寂莫

序

人間五十年の樂しみも過、われハ行年六九に到れり、然るに去年の中春より今におゆて心身常ならず、林下の静を用ひて多くの月日を病家に籠る、秋の夜長く

享保六年秋中

退休軒
松永

生の焉在乃ちくちへゆき流く事と作る
久々に十年の頃まで筆じて是非の器もな
らんのむく候ふ小瓶のふゆへに筆加本已多
くに聖賢の頬もとひと師とをもやなまと
今よりひのちは是れを附手文をを聖の名とせ
るをゆきゆきととて十年余世間の養育
を見聞して通じて十年へ随まきて跡の筆灰事
と知らぬて全く筆灰後人のあみもあ
りとおりひの事とひのとく筆灰し都

虫の音 ネマクラ 枕の下に聞へ、心も澄て過にし事を スミ 傳ツラツラ お
もへハ四十年の頃まで ヨソジ コロ イトナ セヒ シリヨ 業む所ハ是非の思慮なく
只心のむく促に執行ふゆへに非成事已多し マヤ トリツコ ヒ コトノミラボ

マコト セイケン コトバ 誠に聖賢の詞にも心を師とする事なかれと

今おもひあはす、是若き時学文せず聖の道を聞セイ ヨシアシ
かざるかゆへなり、然れども四十年余世間の善惡アトヒ
を見聞して適五十年に餘りて跡の非成事アマ アトヒ
を知る、悔ても全なし、雖クエ セン イヘトモ シカリト 然後人の為にもならん
かしとおもひ当る事を左のごとく書頭し置カキアラハ

享保六キ歳中秋吉日

退休軒 松永

「玉の浦椿」通信

伊能陽子

見事な覆輪をつけて、玉の浦椿が咲いた。伊能ウオーカで訪れた長崎五島の福江島から、はるばる運んで来た玉の浦椿については、二六号で紹介したが、あれから一年たないうちに、白い縁取りの花が幾つも咲いたのだ。狭い我が家のベランダにひしめきあって、たくさんのお薔薇を抱えている。久しぶりに胸をときめかせて(?)植木鉢をのぞき込む毎朝である。

昨年は、白い縁取りのない赤い花を、それでもよく咲いてくれたと喜んだものだったが、今年は誰れ彼れに、玉の浦椿の講釈をしている。

何枚も撮った写真を、得意になつて福江島にも送つた。

そして気になる忠敬墓所の椿。去年はかすかな覆輪をつけて咲いてくれたが、今年はどうなつているかと、とうとう佐原まで足を延ばしてしまつた。観福寺の階段を一足先に上つた主人の「残念でした」の声に一瞬がつかりしたが、薔薇一つ付けていなくともしつかり根を張り、艶やかな葉を沢山つけ背も伸びた椿に、元気で頑張つていてるねと声をかけた。次の墓参りまで、楽しみが延びたということ。

玉の浦椿のお陰で、いそいそとお墓へ足を運ぶようになつた私を、

ご先祖さまたちは苦笑いなさつてゐるかも。

平成14年10月10日

タイムカプセル記念碑



「割円八線対数表」の誤記

小澤健一

1はじめに

もう二〇年も前、佐原の伊能忠敬記念館で伊能の地図と測量の道具類を見て感動し、その後井上ひさしの『四千万歩の男』で伊能の測量に懸ける人間としてのおもしろさやすごさを味わった。それ以来とりたてて気にしないでいたのだが、一九九八年三月、インターネットで「伊能忠敬研究会」の存在を知り、伊能の魅力が甦り、ただちに会費を納めて入会した。

2江戸後期と西洋科学

私の興味の一つは、西洋の科学がどの程度、そしてどんな形で江戸時代に取り入れられていたのか、それがすばらしい伊能図にどう反映しているのかというようなことであった。だから小島一仁著『伊能忠敬』一三五、一三六ページに、伊能が手紙の中で

多禄某(アトレイマイオス)

歌白尼(コペルニクス)

噶西尼(カツシーニ)

弟谷(チコ・ブラーイエ)

刻白爾(ケブラー)

奈端(ニユートン)

の名前を引用していると書いてあるのを見て、大変興味深かつた。

その後、中山茂「日本の天文学—西洋認識の尖兵—」(岩波新書)を

読んでみたら、丁度この頃西洋科学(コペルニクスの地動説やニュートン力学などの書物がぼつぼつ長崎に入り、興味をもつた何人かの人たちによって訳され始めたという。たとえば忠敬の師高橋至時は、コペルニクスのファンだったらしい。

3数表の中の誤記

当時の三角関数表を見たいものだと思つていた。

ところが一九九八年の四月末から六月中旬まで両国の江戸東京博物館で開催された「伊能忠敬展」で図らずもそれにお目にかかった。(余談だが、会期中に井上ひさし氏の講演会もあったのだが、満員で入れなかつた。)会場で購入した図録『忠敬と伊能図』(伊能忠敬研究会編)五九ページに忠敬が使つたという「割円八線対数表(かつえんはつせんたいいすうひよう)」という当時の数表の見開き2ページ分の写真が小さく載つっていた。帰宅して早速拡大コピーして数字をながめてみた(別紙参照)。この表はどういう表なのか。

天文学あたりの玄人筋ではごくポピュラーなものらしいことがありでわかつたが、私はまったく知らなかつた。「素人の悲しさ」と「素人の楽しさ」は裏表の関係のようで、関数電卓を片手にほぼ一日がかりで解説に成功したときはうれしかつた。謎解きのようなおもしろさを味わつた。そして、表計算ソフトExcelを使ってこのページを再現してみた。精度に確信をもつため数式処理ソフトMathematicaも検算に使つた。以下私が初めて知つたことやおもしろかつたことなどを紹介する。

結局両側の角度は右から、中側の数は左からだった。

(2)正弦、余弦、正切(今は正接と書く)は高校生が学ぶ \sin 、 \cos 、 \tan のことで、余割、正割、余切はそれらの逆数、つまり \cosec 、 \sec 、 \cot のこと。(「八線」の八は、この六個にさらに $1-\cos$ 、 $1-\sin$ にあたる正矢、余矢というのを付け加えるらしい)

(3)結果的に、たとえば「正弦対数」とは、小数点の位置を無視する $\log_{10}(\sin(x))$ のことだった。あるのは $10 + \log_{10} \sin(x)$ のことで、私の再現版はこれで作った。

(4)この見開き2ページは角度が七度三〇分から八度〇〇分まで、したがってついでに八二度〇〇分から八二度三〇分までの「一分刻み」の三角対数表であった。この数表の本全体には〇度から四五度までの表が載っているのだろうから、このような見開き2ページが九〇必要であり、すなわち一八〇ページという大部の本である。

(5)私は、拡大コピー機・関数電卓(六十分法の角にも使えるので上の式を見つけるのに助かった)・パソコン(ソフトはExcel、Mathematica)という文明の利器をふんだんに使って表を再現できたのだが、手計算で有効数字九桁もの表を作った昔の人は本当にすごい。

(6)念のため調べてみたら、六ヵ所間違いがあった(〇印を付けておいた)。何度も何度も計算され、何度も何度も翻訳され、そして何度も何度も書き写されたのだろうから、このくらいのミスプリントは当然である。むしろ、紀元二世紀のブトレマイオスから始まつて、ヨーロッパ各国、オランダ、ひょっとして中国、そして日本という、地球規模の科学の伝播を感じられるではないか!しかしも図録の写真を虫眼鏡で見てみたらそのうち一ヵ所はちゃんと赤色で訂正してあるのには驚いた。忠敬が訂正したのだろうか。

というわけで、繰り返しになるが、同じミスでもわれわれのよくやるつまらないミスとは違つて、科学と歴史の重みを物語るいわば「感動的な誤記」だとつくづく感心した。

(埼玉県東野高等学校長・数学)

編集部注

《割円八線対数表》

(かつえんはつせんたいすうひょう)

重要文化財

伊能忠敬記念館蔵

割円八線表は、現在の三角関数表のようなもので、八線表、割円表とも呼ばれていた。当時の数表は比の値ではなく、円の半径を単位に取つたときの線分の長さであつた。割円八線対数表は、割円八線表の対数表である。

次頁 上段 割円八線対数表の原本写し
下段 小澤氏作成の再現版

再現「割円八線対数表」

度分	余割対数		正割対数		余切対数		正切対数		余弦対数		正弦対数	
	度	分	度	分	度	分	度	分	度	分	度	分
82 30	10.8843023313	10.0037314338	10.8805708975	9.1194291025	9.9962685662	9.1156976687	7 30					
82 29	10.8833438279	10.0037480843	10.8795957435	9.1204042565	9.9962519157	9.1166561721	7 31					
82 28	10.8823874719	10.0037647722	10.8786226997	9.1213773003	9.9962352278	9.1176125281	7 32					
82 27	10.8814332540	10.0037814975	10.8776517565	9.1223482435	9.9962185025	9.1185667460	7 33					
82 26	10.8804811647	10.0037982602	10.8766829045	9.1233170955	9.9962017398	9.1195188353	7 34					
82 25	10.8795311948	10.0038150602	10.87571161345	9.1242838655	9.9961849398	9.1204688052	7 35					
82 24	10.8785833349	10.0038318977	10.8747514372	9.1252485628	9.9961681023	9.1214166651	7 36					
82 23	10.8776375759	10.0038487726	10.8737888033	9.1262111196	9.9961512274	9.1223624241	7 37					
82 22	10.8766939087	10.0038656849	10.8728282239	9.1271717761	9.9961343151	9.1233060913	7 38					
82 21	10.8757523242	10.0038826346	10.8718696897	9.1281303103	9.9961173654	9.1242476758	7 39					
82 20	10.8748128134	10.0038996217	10.8709131917	9.1290868083	9.9961003783	9.1251871866	7 40					
82 19	10.8738753673	10.0039166462	10.8699587211	9.1300412789	9.9960833538	9.1261246327	7 41					
82 18	10.8729399771	10.0039337081	10.8690062689	9.1309937311	9.9960662919	9.1270600229	7 42					
82 17	10.8720066338	10.0039508075	10.8680558263	9.1319441737	9.9960491925	9.1279933662	7 43					
82 16	10.8710753288	10.0039679442	10.8671073845	9.1328926155	9.9960320558	9.1289246712	7 44					
82 15	10.8701460532	10.0039851784	10.8661609348	9.1338390652	9.9960148816	9.1298539468	7 45					
82 14	10.8692187985	10.0040023301	10.8652164684	9.1347835316	9.9959976699	9.1307812015	7 46					
82 13	10.8682935560	10.0040195791	10.8642739769	9.1357260231	9.9959804209	9.1317064440	7 47					
82 12	10.8673703172	10.0040368656	10.8633334515	9.1366665485	9.9959631344	9.1326296828	7 48					
82 11	10.8664490725	10.0040541896	10.8623948839	9.1376051161	9.9959458104	9.1335509265	7 49					
82 10	10.8655298185	10.0040715509	10.8614582656	9.1385417344	9.9959284491	9.1344701835	7 50					
82 9	10.8646125379	10.0040889497	10.8605235681	9.1394764119	9.9959110503	9.1353874621	7 51					
82 8	10.8636972292	10.0041063860	10.8595908432	9.1404091568	9.9958936140	9.1363027708	7 52					
82 7	10.8627383823	10.0041238597	10.8586600226	9.1413399774	9.9958761403	9.1372161177	7 53					
82 6	10.861874888	10.0041413709	10.8577311179	9.1422688821	9.9958586291	9.1381725112	7 54					
82 5	10.8609630406	10.0041589195	10.8568040211	9.1431958789	9.9958410805	9.1390369594	7 55					
82 4	10.8600555295	10.0041765056	10.8558790239	9.1441209761	9.9958234944	9.1399444705	7 56					
82 3	10.859149475	10.0041941291	10.8549558184	9.1450441816	9.9958058709	9.1408500525	7 57					
82 2	10.8582462866	10.0042117902	10.8540344965	9.1459655035	9.9957882098	9.1417537134	7 58					
82 1	10.8573445387	10.0042294886	10.8531150501	9.1468849499	9.9957705114	9.1426554613	7 59					
82 0	10.8564446960	10.0042472246	10.8521974714	9.1478025286	9.9957527754	9.1435553040	7 60					

文化元年（一八〇四年）のこと

安藤由紀子

十二月四日 幕命、「蛮書を持って地図等仕立申すべき」
十二月五日 幕命、「西国測量」

至時先生の死と間重富

測量中、伊能忠敬が江戸に丸一年いたのは、文化元年と四年のみであつた。特に元年は、第一ステージを終えた彼にとって画期的なことの連続であつたので、ここに一文を割いて解説しよう。先ずは年譜である。

文化元年年譜

一月五日 高橋至時、没（四二）

四月 長男高橋景保、天文方に任せらる（二〇）

八月 日本東半分の地図、第四回までの総合図、略称「沿海

地図」幕府へ提出 津軽・南部両藩に、蝦夷地警備を命ずる

九月六日 将軍家斉、大広間で伊能図閲覧

九月七日 ロシア船長崎神の島に船がかりの由長崎奉行より注進あり、目付遠山金四郎景晋をつかわし、速やかに帰国すべしと諭告せらる

九月十日 忠敬、幕臣となる小普請組・十人扶持・天文方出役

天文方手付手伝 第二回ロシア使節レザノフ長崎にて通商要求 拒否されてむなしく翌年帰る

十月

病のため遅れていたが、間重富出府して暦局入り、高橋景保を補佐し、「ラランデ」の完訳に当たる（文化六年四月まで）家督駒場野に砲技を見る

この年長男景敬再婚力

至時先生は、正月五日に亡くなつた。前年の十月忠敬が第四次測量からかえつてきたときはもう死の床についていたろうが、「ラランデ」への熱中が彼の死期をはやめたのは明らかである。彼が先生の死の床のかたわらにいたことも、明らかである。たつた三か月後の別れであつた。今度の映画「伊能忠敬」を御覧になつた方は、自宅の私設天文台で、一人号泣する場面に出くわすが、あれがあの映画でいちばんリアルなシーンだった。

天才的とはいつても後を継いだ長男景保はまだ二十歳、病氣のため間重富が十月にやつと出府してあたらしい測量の指揮系統がととのつた。

至時の死によって天文方でどうしても重富の手が必要になりこの段階で西国測量が忠敬の手に落ちてきた。至時先生は生前、西国測量は重富に任せる積りで、そのための往復書簡も多いが、事情が変わつてしまつては仕方がない。

重富は学者であり、西国測量が忠敬の手に渡つても嫉妬するような心の狭い人ではなかつたし、測量という根気のいる体力もいる仕事には向いていなかつただろうというのが定説になつてゐる。だからこの交代は、伊能図にとつて幸せだったといえよう。

後のものだが、重富の性格を髣髴とさせる資料を引用する。

八四一一一〇

間重富書簡 伊能忠敬宛 文化八年十二月

伊能忠敬記念館藏

(前略) 三月初めに鹿

児島へ御着きの由、しかしながら今度は薩摩の両島、壱岐、対馬、五島その外

島々お測りのおつもり、中々大規模、：：

：：： 当年すでに

六十七歳におなり、七十歳にして

御大成なされる御予定とか、凡人の企て及ばない所

所と想ひます。すべて西洋人の理学に

対する考えは、我がためにあらず、人のため、天下のためであつて、それをおこなつた人を論ぜず

人は死して止む事、実際に公とは斯くの如きを定めとなすべきものです。まことに天にご奉公と

決意され業を終え為さるようお祈りしております。私は一昨年

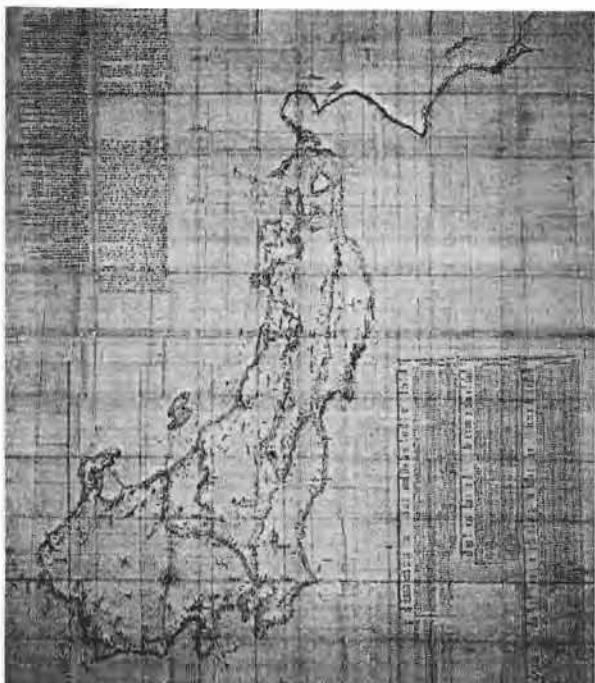
以来、不快：：：：若い頃より病身

でお勤めしてまいりましたが、年々の故障がでてきてすっかり老衰してしまいました。あなたの

お元気うらやましく存じます。(後略)

地図上覽と忠敬の武士任用

九月になつて將軍の地図閲覽と(六日)忠敬の武士への任用(十日)



東日本(沿海地図)文化1(1804)年

神戸市立博物館藏

が続く。この二つの事件は、忠敬の仕事を権威付け、西国測量を容易にした。

琵琶湖までの東日本がまとまつたところで上覽ということになつたのだろうが、何時ごろこの事が決まつたのか明らかでない。ただ忠敬は四次は勿論全体に手直しして万全を期しての提出で、大忙しだつただろうと想像される。

上覽の記事は「將軍が見た」という簡単なもので、「続徳川実記」、「文恭院殿御美記三十七」、文化元年九月に、「〇六日天文方より呈せし日本國中絵図外殿へ臨せられて觀給う。」とあるだけである。

右の事があつて四日目、九月十日、忠敬は城中に召され焼火間ににおいて若年寄堀田摂津守より左のような登用辞令を与えられた。堀田は気軽に人にあつたというから多分対面してのことであろうか。

伊能勘解由

其方儀 是迄国々海辺測量御用並 地図骨折相勤候 以後も 右筋
御用被仰付候ニ付 拾人扶持被下置 小普請組被仰付

そしてその翌日小普請組支配小笠原若狭守より天文方へ出役して勤務すべき事が伝えられ、これ以後忠敬は、幕府の官吏として天文方に出役し、高橋景保に属し「手伝い」の職につくことになった。小普請組は下等官吏にすぎなかつたけれども、百姓からこれにつくことは、当時異例のことであつた。

地図上覽と任官とは以後の仕事に大きな便宜を与えた。第一ステージで蒙つた様々なトラブル（関所通行上のトラブル、加賀藩の非協力、糸魚川事件など）はすつかり影をひそめ、幕府主導の壮大な事業が展開され始めたのである。

仕掛け人は堀田摂津守、桑原隆朝、高橋景保、等であつたろう。出費の大きさから見て筆頭老中松平信明もかかわつていただろう。

今東京国立博物館に美しい伊能図を残してくれたこの人は、朝廷に対しても、将軍に対しても筋を通して自説を曲げなかつたような人だから、防衛のため忠敬の事業を応援したと思われる。

年譜によれば、将軍も防衛事業に興味だけはしめしたらしい。

津軽、南部両藩に蝦夷地警護を命じ、伊能図を観、駒場野に砲術を見、蘭書による地図作成、伊能の西国測量などを命じている。そこにどれだけ将軍の意志が働いていたかは不明だが、外圧の切迫を知るこ

とはできる。

長男の再婚

何の記録も残つていないが、この年長男景敬と小川リテが結婚したらしい。リテはいまの東金の人である。九十九里で米屋をやつていた勘当の身の長女イネ夫婦と、親友の飯高惣兵衛が動き、とりまとめたものであろう。小川家は飯高家と同じく地方代官などを務める名門であった。翌々年長孫三治郎がうまれ、忠敬の不在中に結婚式はしないだろうというわけで、この年ころと推定されている。景敬三八歳、リテ二〇歳であつた。

長男景敬は体が弱く後年忠敬はこの嫁をたいへん頼りにした。忠敬の留守中「河岸問屋一件」という訴訟事件が延々と続いた。長女イネは文化七年、婿盛右衛門が亡くなつて出家し、妙薰と名をえて佐原へ戻つたが、この二人の女性が事件の解決にも大きな力を發揮した。

こうして、色々の事があつた文化元年は暮れていつた。翌二年二月、幕府事業としての大測量隊が出発することになる。第二ステージの始まりである。

参考文献

大谷亮吉『伊能忠敬』

『高橋景保書簡』 八二一一一〇

帝国学士院蔵版
伊能忠敬記念館蔵

東京地学協会編『伊能図に学ぶ』

『続徳川実記』

萩原裕雄『江戸幕閣人物百話』

吉川弘文館
朝倉書店

立風書房

加賀藩天文暦学者 西村太冲(一)

河崎倫代

はじめに

そらく、越中の西村太冲(たちゅう)であろう(千葉県史料『伊能忠敬測量日記』三〇三~三〇八ページ)。逆に、訳あって一字も記されなかつた人物もいた。その一人が、同じく越中の石黒信由である。私は忠敬との接点を求めて太冲の出身地富山県城端(じょうはな)町を訪れるうちに、十六歳(以下、すべて満年齢)で天文暦学を志して上京したという太冲少年に関心を抱き、ついに彼の一生を追うことになつてしまつた。江戸時代の北陸にも波瀾万丈の科学者人生を送つた人物がいたことに驚き、感動した。

そして昨年はからずも『越中城端の人 天文暦学者 西村太冲伝』という小冊子を城端町から出していただいた。今回そのダイジエスト版という形で、三回にわたつて西村太冲を紹介させていただくことになつた。忠敬が旅先で出会つた人、出会えなかつた人の人生にどんな影響を与えたのか、西村太冲と石黒信由を見てみたい。そしてまたこの機会に『測量日記』や『星学手簡』の中で、主として高橋至時によつて語られた西村太冲像に修正を加え、彼の名誉挽回をはかりたい。

一、越中・城端から京都へ

藤九郎左衛門について、忠敬は次のように記している。
「此の斎藤氏は算術者にて、授時暦をも知り、葦山御代官へ算術・暦術共に御指南も致し候よし、所持の測器見せ、当時の測量・暦談に及び候ところ、感心の様に相見る」

忠敬との出会いは、この人物にどんな影響をもたらし、そののちどのような人生を送つたのであろうか、興味が持たれる。

ところで、『測量日記』の中で最大のスペースが割かれた人物は、お

1 城端に生まれて

城端は越中(富山県)の西南部に位置し、町の東南には標高一千メートル級の五箇山地が屏風のようになつてゐる。五箇山への入口といふ交通上の要衝にあつて古くから市場が発達し、周辺の村々の経済的中心だった。十六世紀後半には浄土真宗大谷派の善徳寺が移住し、その門前町としてもおおいに栄えていた。西村太冲は明和四(一七六七年、城端の西下町に生まれた。元の姓は義谷、諱(出生直後に命名される本名)は篤行、太冲は通称である。父は長兵衛といい、近く

の養谷村から城端へ移住し商業を営んでいたという。

2 京都・西村遠里に弟子入り

天明三（一七八三）年、「天文暦象の学をもつて身を立てる」ために、十六歳の太冲少年は京都へと旅立つた。北陸の内陸部にありながら、城端は京都とは意外に近い関係にあつた。善徳寺の僧侶らは本山への参詣や勉学のためにしばしば上京した。また城端で生産された絹は、城端絹として白地のまま京都の問屋へ送られ、西陣で加工・販売された。その運搬輸送を仕事とする人たちが、城端と京都を定期的に往復していた。城端には京都の文化や情報が流入する直接ルートがあつたのだ。おそらく太冲も上京にあたつて何らかの情報を得ていたに違いない。

京都に出た太冲は、当時民間にあつて天文暦学の第一人者だった西村遠里に弟子入りした。大和国（奈良県）に生まれた遠里は、天文暦学・算学・測量術などに精通し、京都で薬屋を営んでいた。

江戸時代の暦は、農耕の時期を知り日々の吉凶を占うなど、日常生活に欠くことのできないものであり、幕府にとつては国家を治める重要な制度・道具であった。江戸時代初期まで約八百年間用いられた中國伝来の宣明暦（八六二～一六八四）は、暦と実際の太陽の動きとの誤差が二日にも及び、日食・月食の予報も粗雑で誤りが多かつたので、貞享元（一六八四）年に廃止され、かわって幕府基所を預かる

渋川春海が考案した貞享暦（一六八五～一七五四）が施行された。日本人が独自に作った最初の暦である。これをきっかけに幕府に「天文方」が設けられ、渋川が初代天文方に任命された。以後、毎年の作暦はまず江戸の幕府天文方で科学的・天文学的な部分が計算・作成され、次に京都の土御門家に回され、様々な暦注が追加されて完成するとい

う手順を踏むようになった。

天明三（一七八三）年に上京した太冲の、京都での様子を語る史料はない。ただ同一年に出版された『平安人物志』「暦算」の項には、「西村遠里 字は得一 号は居行 上京兼町 西村千助」とある。遠里は上京兼町（上京区今出川通小川東入）に居住し、おそらく太冲もその近くに住んで遠里のもとへ通っていたと思われる。近くには遠里が出入りしていた土御門邸があり、邸内には陰陽道の安倍晴明を祀る晴明神社が建てられていた。また城端絹が運ばれた西陣も目と鼻の先の距離にあつた。遠里のもとで天文暦学に励んでいた太冲は、数年のうちに、授時暦・貞享暦の二暦に精通するほどになつた。

ところが、上京してわずか四年目の天明七年九月二二日、師の西村遠里が亡くなつた。遠里には子がなかつたので、弟子たちが相談して太冲を後継者に選んだ。ここに養谷姓を改め、西村太冲と称することになった。二十一歳の時である。渋川春海なき後の天文暦学界第一人者とされた遠里の後継に推されたことは、太冲の才能をもの語るできごとといえよう。太冲は遠里に教わった暦法を用いて『符天暦』を著した。

二、大坂時代

1 麻田剛立に弟子入り

道半ばで師を失つた太冲は、さらに天文暦学を究めようと、翌天明八年大坂へ出た。民間の天文暦学者麻田剛立の天文塾「先事館」をたずねたが、すぐには入門を許されなかつた。まもなく、城端に住む母親が病氣との知らせに太冲はいつたん帰国したが、母はすでに全快していたので、その日のうちに城端をたつて大坂の剛立のもとへもどつ

た。さすがの剛立もその熱心さに感じ入り、ついに弟子入りが許されたという。寛政元年（一七八九）頃のことである。

同じころ剛立に入門した人物に高橋至時と間重富がいた。剛立が自らの編み出した秘奥書「歳実消長法」（太陽年の長さが毎年変化しているので、それをもとに計算する方法）を伝えたのは、高橋至時・間重富・西村太冲・坂正永の四人だけだった。

太冲の第二の師麻田剛立は、豊後国杵築藩（大分県杵築市）の儒学者綾部安正の四男として、享保十九（一七三四）年に杵築に生まれた。本名を綾部妥彰という。幼いころより天文現象に興味を示し、少年期にはすでに太陽・月などの天体の位置や運行の予報計算をおこなったことが、太冲の著した『麻田剛立先生行状記』（石川県立図書館所蔵）に記されている。

その後医術を学び藩主の侍医を勤めるかたわら、本格的な天体観測と実測にもとづく暦法の研究に取り組んだ。しかし安永元（一七七二）年一月頃、ひとり杵築を出て大坂に移り住み、麻田剛立と改名して民間の天文暦学者としての人生を歩みはじめた。剛立については、大分県教育委員会の『大分県先哲叢書 麻田剛立』や、安藤由紀子氏が本誌に連載された「二人の師 高橋至時と間重富」に詳しい。

2 麻田派の天体観測

太冲が大坂にいた期間ははつきりしないが、寛政五（一七九三）年一月十六日夜、麻田派一門が大坂の数カ所で月食観測を実施した際に、太冲は剛立の心齋橋チームで「垂球搖役」をつとめた。入門から四年目のことである。剛立の先事館は本町四丁目にあつたが、その時々で観測に最適な場所を求めて出張したので、麻田派の天体観測は大坂町人の目に触れることが多かった。

ちなみに、安永四（一七七五）年閏十二月十五日の月食観測を見物した人々の中に、安芸国竹原の儒学者頼春水がいた。頼山陽の父である。彼が故郷へ出した書状には、次のように書かれている。

「四、五晩も続けて観測準備をしてきたとのことだ。昨晩は麻田の門人たちが四、五人で観測し、見物人も多かつた。遠目鏡や糸を張った器具や、その他いろいろな観測器具があり、下には時計が二つそろばんがあつた。一晩見物したが寒くて困つた。麻田の予言した通り、月食の時刻が土御門や渋川の作った官暦の予報とは少し違つていたのには興味を持つた。麻田は天文学の達人だ」

この頃太冲はまだ城端にいたが、麻田派の天体観測の様子や、剛立の実力が大坂だけでなく地方にも知られていたことなどがよく分かる。太冲もこのような観測チームの一員としての役割を果たせるまでになつたのだ。

この時、高橋至時は大坂城の南、上本町二丁目の同心屋敷近辺で、間重富は富田屋町長堀北辺で独自に観測をおこなつた。麻田派一門は大坂の数カ所で同時観測をおこなつてそのデータを持ち寄り、互いの数値を比較して、より精度の高い天文暦学をめざしていた。また剛立と高橋至時、間重富の三人は『暦象考成後編』（中国で編集された西洋天文学の漢訳本。太陽運動についてケプラーの橙円説を採用している）の共同研究者でもあつた。

それに対して、日本天文学史研究に大きな足跡を残した渡辺敏夫氏は、太冲を剛立に最も信頼された眞の弟子と位置付けている。麻田派一門の観測データをほぼ網羅した『麻田家両食実測』を残したのは太冲であり、剛立の伝記を残したのも太冲である。その死にあたつて自らの著作・書状などを意図的に処分させたとされる麻田剛立の事績の全容は、太冲なくしては後世に伝わらなかつたといつても過言ではな

い。

三、城端から金沢へ

1 城端へ帰る

寛政五（一七九三）年一月の大坂での月食観測がらしばらくして、太冲は城端へ帰った。同年七月十五日の月食は、「城端は曇天」のため見えなかつたという記録が残つてゐる。それから金沢出府までの数年間のことは、小原治五右衛門一白とともに、天体観測を続けていたことしか分からぬ。城端塗の蒔絵師の家に生まれた小原一白は、太冲より四歳年上の幼なじみであり、太冲の最初の弟子でもあつた。約二〇年間、二人は常に二人三脚で天体観測を続けた。

北陸の地にあつて、日々気象・天体観測を続ける太冲は、時には奇人・変人扱いされたのではないだろうか。しかし、ついに太冲の認められる時がやつてきた。寛政十一（一七九九）年一月、加賀藩明倫堂の講師に招かれたのだ。太冲は三二歳になつてゐた。

寛政四年の開校以来、本保以守という禄高千八百石の藩士が天文学の講師をつとめていた。本保は京都勤番中に西村遠里から天文暦学と山崎流測遠術を学んだという。いわば太冲の兄弟子である。寛政六年に辞任した本保に代わつて、太冲が藩校の講師に選ばれたのはなぜだろうか。

金沢出府と前後して太冲に弟子入りしたのが石黒信由（一七六〇—一八三六）である。石黒は通称を藤右衛門といい、越中高木村（富山県新湊市高木）の肝煎役（村役人）を勤めていた。算学を富山の中田

不備の多かつた宝暦暦に替わる新たな暦法を計画していた幕府は、天文暦学の第一人者であった麻田剛立の力を借りることにし、剛立の推举で高橋至時と間重富の二人を採用した。身分を越えた異例の抜擢

であった。寛政の改暦後も二人は江戸と大坂に分かれて天体観測や研究を続け、ひんぱんに連絡を取り合つてゐた。寛政十一（一七九九）年九月六日付の高橋宛て書状の中で、間は太冲が加賀藩に招かれた事情を次のように記してゐる。

「太冲は城端の奉行が大いにひいきして、その推舉でこの度招かれたようだ。しかし金沢へ出府後は一合の米ももらえず、手持ちの金もなく、旅籠屋で泊まつてゐること。さても驚いたことである。いたわしいことである。上方へ呼んで引き立ててやりたいが、かえつて親族や息子たちが難儀することになつても困るだろう」。

加賀藩の待遇には誤解があるようだが、この書状をヒントに、太冲が加賀藩に招かれた事情を推察した。

寛政三年、城端を支配する今石動町奉行に遠田誠摩が就任した。同五年の春に大坂から城端に帰つて、日食・月食の観測を続けていた太冲と小原一白のことは、町役人から奉行所へ、さらに金沢に住む奉行にも報告されてゐたであろう。はじめは奇異な目で見られていたに違いない。しかし、私利私欲にとらわれないひたむきな活動に、理解を示す人々も増えていたことだろう。奉行遠田誠摩もその一人であり、空席になつてゐた明倫堂の天文暦学講師に太冲を推挙したのではない。こうして商人の息子太冲が、加賀藩士の子弟たちに天文暦学を講義することになつた。

金沢出府と前後して太冲に弟子入りしたのが石黒信由（一七六〇—一八三六）である。石黒は通称を藤右衛門といい、越中高木村（富山県新湊市高木）の肝煎役（村役人）を勤めていた。算学を富山の中田高寛に、測量術を金沢の宮井安泰（本保以守の弟子）に学び、寛政十一年頃、はじめて太冲に教えを受けた。新湊市博物館の高樹文庫『書状遺留帳』には、石黒から太冲に宛てた寛政十二年二月から享和三（一

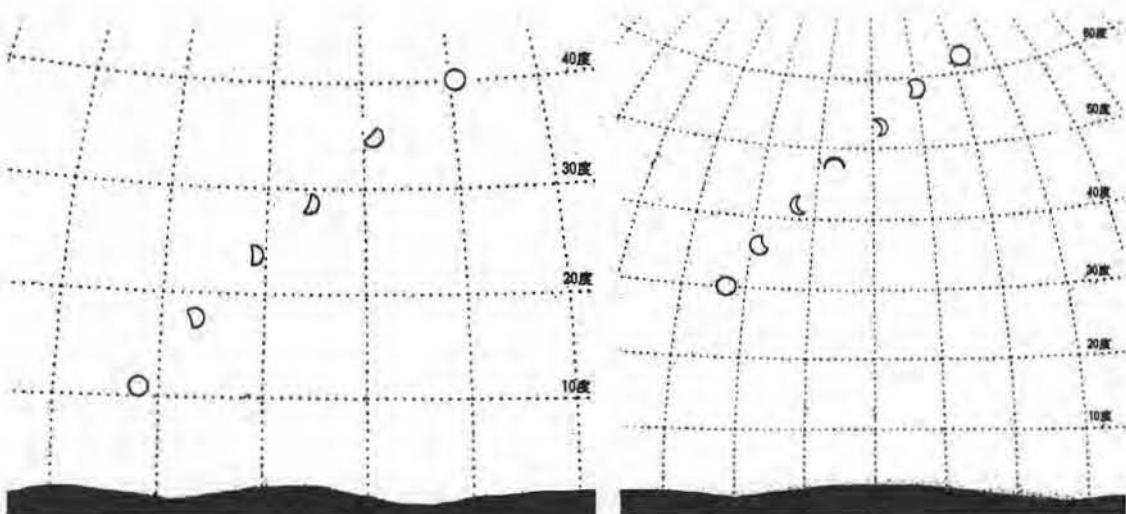
八〇三）年正月にかけての書状の控えや草稿が残されている。太冲の編んだ『実符曆』や算書『八線表』などの貸出を依頼している。

3 金沢で日食観測

金沢へ出た太冲は、城端と同様に天体観測を続けていたが、寛政十二（一八〇〇）年四月一日の日食は、好条件で観測を行うことができた。この時の記録は東京の前田育徳会尊經閣文庫『日食・月食実測』の中に残されている。観測場所は金沢母衣町、観測者は「沢田吉左衛門・西村太冲・小原治五右衛門」とある。沢田は禄高千石の加賀藩士の家に生まれた。諱を亮采、通称を吉左衛門・義門という。おそらく明倫堂の生徒として太冲に天文暦学を学んでいたのだろう。沢田邸と太冲の宿所山崎屋平兵衛宅は徒歩わずか五分くらいの距離にあった。日食観測は沢田邸の一角でおこなわれた。この時の観測機器は「子午線表・垂搖球・授時公・観星鏡・写景鏡・青祿鏡・象限儀・視徑儀・西洋鍼」である。麻田派の天体観測用機器をすべて揃えていたことに驚かされる。

この日金沢城内にも写景鏡（写影鏡とも記す。望遠鏡と併用して日食の太陽の像を投影する装置）が設置され、重臣たちが日食を観察したと『加賀藩史料』に記されている。おそらく太冲が手配したものであろう。御用番奥村尚寛は『筆のまにまに』の中で、かなり詳しく説明している。

「登城すると居間書院に写影鏡があり、希望者は見よとのことだつた。横山山城守や家老や若年寄らが見物した。これは日食を見る鏡である。六、七尺（一尺は約三〇㌢）ばかりの長さの筒の先にレンズが一枚あって、その末に丸い形に墨を引き、◎ このような筋をつけ、そこへレンズから日影が射るようにしてある」



享和2年2月16日の月食図(同右)

寛政12年4月1日の日食図(尊經閣文庫『日食・月食実測』より、渡辺誠氏作成)

この日の観測データは江戸の高橋至時と大坂の間重富と太冲の間で交換されていましたが、石黒信由の六月十一日付け太冲宛ての書状から知られる。

「今回の日食について、江戸・大坂・金沢の観測記録を下さり、ありがとうございます。当日は快晴で、私も初めから終わりまで拝見しました。私は測量機器など所持していないので、あなたさまがとてもうらやましい限りです」

弟子入りして間もない石黒にも幕府天文方のおこなった第一級の観測記録を公開していたことに、麻田派天文暦学者としての太冲の科学者精神がうかがえる。

4 太冲の象限儀

太冲が使用した観測機器は麻田剛立や間重富・高橋至時らが製作・改良した最新のものであったと思われる。垂搖球儀は時刻を測定する振り子時計で、前述の寛政十二（一七九九）年の日食観測では一日に約六万四千回の振動数を数えた。象限儀は天体の高度を測る機器で、天体観測や地図測量には欠かせないものである。太冲の象限儀については、間が寛政八年十一月二十四日付高橋宛ての書状の中で、次のように書いている。

「糸まさ（糸目が糸のように細くて密な木材）一本を三両で買い求め、太冲の象限儀と自分の三尺（約九十四cm）の象限儀などを作った」太冲は城端へ帰つてからも、大坂の間へ測量器具を依頼していたようだ。父長兵衛の代に城端へ出てきて、商売でかなりの財産を築いたといわれているが、太冲自身はたいした収入もなく、高価な観測機器の購入に養谷家の財産を使い果たしたという話も真実味を帯びてくる。日食のあつた寛政十二（一八〇〇）年は、伊能忠敬が第一次測量（蝦

夷地測量）をおこなった記念すべき年である。三年後の享和三（一八〇三）年七月二日、金沢入りした伊能測量隊が宿泊し夜間の天体観測をおこなった住吉屋太兵衛宅は、偶然にも沢田邸と至近距離にある。

（つづく）

富山市科学文化センター

富山市科学文化センター／Toysama Science Museum

富山市科学文化センターは、富山の郷土性豊かな科学博物館です。

開館時間 平日9時～午後5時30分
観覧料 470円（小・中学生350円、幼児は無料）
休館日 2月1日、3月29日、10月1日、12月25日、26日
1月1日（1月1日）、1月2日（1月1日）、2月1日（2月1日）
4月1日（4月1日）、4月2日（4月1日）、2月26日、30日（2月26日）
プラネタリウム（約40分）
開始時間 平日：10:00～11:10～12:30～15:40～
日程：10:00～11:10～12:30～14:20～15:40～
プラネタリウム休止日：3/5(火)～4/2(火)

最終更新日：2002-02-21



富山市天文台ホームページへ

伊能忠敬の加賀藩測量



江戸時代の地図と言えば、伊能忠敬の地図が有名です。忠敬は51歳の時に当時大坂から江戸に招かれた天文暦学者、高橋至時に弟子入りし、天文暦学を極め、緯度一度の距離を測ることを目的として、寛政十二年（1800）蝦夷地の測量の第一歩を記しました。その時、忠敬56歳でした。その後、文化十三年（1816）までに全国の測量を行い、日本地図を作成途中の文政元年（1818）に死去しました。忠敬が歩いた距離はちょうど地図一周分、約四万キロとされています。忠敬が苦労した測量結果は文政四年（1821）に「大日本沿海輿圖全図」として幕府に上程されました。大谷亮吉によれば、その地図の誤差は概ね2分以内のことです。

*加賀藩天文暦学・測量に関心のある方は、富山市天文台のホームページを開いてみて下さい。渡辺誠氏作成の詳細な情報が満載されています。

URL <http://www.tsm.toyama.toyama.jp/>

伊能忠敬の足跡を辿つて

河島 悅子

私の本籍は福岡市博多区上呉服町、領主客館(地元では大賀屋敷といふ)の隣家が父祖伝来の地である。忠敬先生が文化九年八月に隣家より出された手紙を、はからずも目にした。

近藤文書

一 長崎へ罷越し候ば上毛氈一枚、あるいは二間物、買整え候様二申越され承知致し候、しかしながらオランダ渡りものに候えば買入れ候儀おぼつかなく候、お聞きもなさるべく候、オランダ船三年程入津これなく候間、長崎も難儀致し候、ビードロ、唐よし、オランダ薬物は三、四倍の高値に相成り候、唐渡り物に候ば格別の高値にも之有まじく候、紺毛氈四枚も承知致し候、白木屋一枚何程くらい致し候や後便に御聞合せ値段仰せ遣わさるべく候、おおよそ値段知れ候えば調べよう候

一 此度、九州測量も前々に相変らず諸大名方御取持ちも宜しく、御国産も相応に御贈惠下され、上下一同大慶致し候これにより長崎買物に差支えはこれなく候えどもオランダ物は一切に



これ有まじく候

長崎買入れ置きの古物にても之有べきヤ此度は長崎も不景氣の時節に罷り越し候は殘念に候 以下略

八月八日

伊能三郎右衛門殿

伊能勘解由

寛永十八年より福岡、佐賀藩が交代で長崎警備を勤めていた。唐渡り物なら手に入るだらうとの的確な情報である。

文化七年(一八一〇)より十二年(一八一五)までオランダはフランスに併合され消滅していた。ナポレオン敗退後旧に復したが、幕府に「風説書」を差出す商館長ヘンドリック・ズーフは固くこれを秘し、イギリス、ロシアとの不仲を伝えるのみであった。ズーフハルマで有名な彼は商館長職十三年を含む十七年間を日本で過ごしたが、その間文化元年(一八〇四)ロシア使節レザノフ来日、同五年(一八〇八)英船フェートン号事件では長崎奉行松平康英引責自殺まで起き、三度の江戸参府では江戸定宿長崎屋類焼で命からがら逃げた体験を持つ人である。

フェートン号事件以来長崎警備は強化され、御台場は古台場、新台場、増台場と港内外、小島に至るまで海岸線は砲台で埋め尽くされた。忠敬先生が長崎測量に入られたのは丸一年後である。日々西国巡検使並の待遇を得それ以上の人足を要求。巡検使は年貢納め舟を計り、先生は海岸と道を測つた。

文化九申歳八月

伊能勘解由様

坂部貞兵衛様

公儀天文方御領内測量之節

付廻出勤被仰付候ニ付萬覺書

高田村莊屋

是松岩七

「御尋之節、御答振心得方」これは箇条書で新開田石高数御尋ねの節は不知、或いは元禄絵図の通り申上ルとか形式的になつた巡検使制度と同様であつた。百姓が正直に答える者でない事は忠敬先生が百もご承知であろう。

各地に残る測量時古文書の共通内容に村内往還〇町〇間何村迄ある。新旧幾筋もの伝承が残る地域では決め手になる事があり各地で好んで読ませて頂いた。長崎街道、唐津街道と二冊の本を出版するにあたり、前書が調査に十六年を要したのに較べ後書は九ヶ月程で済んだ。出身地で土地勘があるのが幸いしたのだが、何よりも測量日記の活用法を会得した結果である。資料があつても不明地点が長崎市日見峠。法務局の旧字図を持つて軒並み古老に尋ね通いつめた峠だつた。

明治十年(一八七七)西南戦争勃発。政府思うに、薩軍必ず長崎を突き船を奪い、海路東上すると。戦略上最上策であつた。長崎港と漁村日見宿の間に屹立する二百五十メートルの峠頂上に多量の弾薬を運び上げた。馬が歩くも容易でない急坂では人の背に頼む外ない。しかし薩軍は熊本城に取付いた。日見峠では無用の長物と化した弾薬を降ろす際、夥しい怪我人が出たという。それから間もなく日見新道が作られた。人力車、大八車が楽に通れる道で有料だつた。その時旧道は寸断され形を変えた。大正十三年県道トンネル開通、山は削られ残土が旧道に被せられたと土地の古者は語る。果たしてそうだらうか。

法務局で旧字図明治五年と二十一年製を探す。二十一年字図は完全に残つていた。幸いにも番地は変わつてない。地目が畑、山林だったのが宅地になり、低地のみ残土が被さり廃道になつていた。佐賀藩

諫早領より日見峠まで三千二百メートル、測量日記では次のようにある。「佐賀藩領矢上村、御料所日見村境、御料所界へ繋ぐ、此より長崎街道を測る。字腹切坂、右に馬頭観音あり（現存）日見本村人家、長崎街道駅日見宿、日見川石橋八間、測所前に打止、街道六町三十三間、本陣馬駆伝兵衛、十六日、高木郡日見村出立、字西ノ下、枝河内坂下郷ノ内字岩間、字山口、字松尾、馬川幅五間、河内坂下郷、字峠ノ下、字梨ノ木坂、字岩谷、字日見峠、彼杵郡長崎村枝本河内郷字日見峠」造成で大型団地化された腹切坂は致し方ないとして日見宿より峠まで地名は旧字図上に残らず記されていた。村は現在の大字であり字は道の曲り角の印であった。三十曲りともいわれる峠道の曲り角に必ず記された小字名、忠敬先生の一定のルールだった。

慶長期、各大名は領地經營に当たり道を境に村切りを行つた。道普通の労の公平も図つたのだろう。だから測量日記で右○村、左△村の文字がやたら目に付く、現在でも市町村界である。長い間伝承に振り回された挙句辿り着いた忠敬先生足跡測定法だった。といつても私の古道調査成果を地図上に載せる技は今持つて不確かである。何故なら旧字図は六百分の一、机上の一万分の一に縮小する時なまじ現地を知つてはいるだけに思つたように線が引けない。忠敬先生だつて書いたり消したりなさつてんだから、ま、いいかと変な慰め方の繰り返しだ。測量日記と旧字図の照合、解つてみればコロンブスの卵でなんの苦もないが、いやはや長く苦しんだものではあつた。

文化十年（一八一三）八月、四年ぶりの蘭船が二隻入港した時に測量隊も長崎市中に來た。

長崎港は西洋列強の船舶が絶えず窓い侵入する港で、厳しい防衛線でもあつた。軍事基地即海岸線である。測量隊は御台場を測つていつた。対岸を湾奥に向かつて「左神崎御台場、右にイカツ岩、雷崎、釣

鉄岩、此所より入江向うへ鉄繩を引く元岩也」巾着型の港口を封鎖するのである。「左男神ノ社、左の山天文ヶ峯という、左大多尾御台場下、左寝小屋、スズレ崎、左山上に御台場有り、左西泊御番所、黒田、佐嘉交代、当時は黒田の番」対岸に戸町御番所、西泊と共に千人番所といわれ佐賀は二交代、黒田は四交代で一年を勤めた。両番所共に幕を廻らし夜は一間置きに高張提灯を掲げ一晩中柏子木を打鳴らし、対岸まで灯火を掲げた舟を鉄鎖に数珠繋ぎに並べた日本最大の海の閻所である。当時を彷彿とさせる石垣や今も雨漏り一つせぬ硝煙蔵、兵舎跡が現存する。当時大砲の事を石火矢といつたが、一貫、二貫目弾を発射する、回転式の台に乗つたものである。

長崎御台場は承応二年（一六五三）設置といわれるが、慶安元年（一六四八）三月破損使用難成ニ付、公儀へ返納（佐賀藩銃砲沿革誌）、正保四年（一六四七）寺沢兵庫守より石火矢献上（先蹟録、筑前ノ士立花某書、長崎日記）されている。

寺沢兵庫守堅高は唐津、天草の領主であったが、島原・天草の乱の責を負い正保四年自殺、無嗣子絶家（寛政重修諸家譜）となつてゐる。彼が生前延命工作、もしくは幕府におもねる為に贈つたものが数月後に長崎に届いたようだ。ということは承応以前より御台場が存在した証ではなかろうか。ともあれ忠敬先生が測られた當時、両家持備砲百十三、長崎奉行持、大村藩持台場を加えるとかなりの数である。

「江戸町出島阿蘭陀屋敷入口石橋手前先日残（印に繋ぐ）石橋手前」とは出島橋横制札場である。制札にはこう書いてあつた。



同・西泊御番所



長崎港の防衛線・戸町御番所

禁制

- 一、傾城遊女^{（シテスレバ）}の外女人入る事
- 一、高野ひじりの外、出家、山伏入る事
- 一、諸勧進の者、並びに乞食入る事
- 一、出島廻り、榜示杭の内船乗り回る事附たり、橋の下、船乗り回り事
- 一、断りなくして、オランダ人出島より外に出る事
- 右の条々堅く相守るべきもの也

「此より出島阿蘭陀屋敷を左にして回る、阿蘭陀屋敷水門前」船でないと測れない所である。「出島一周五町四十四間」商館員は毎日五百メートルの島内をグルグル回って運動していた。(シーボルト)「新地唐物藏一周四町三十間一尺」船乗回り禁制地も公儀御用ともなれば天下御免である。

「九月朔日、阿蘭陀出島館並びに象を見る」前回の象は享保十四年(一七二九)この地より三百五十里を七十五日かけ江戸に着き將軍吉宗に献上された。忠敬先生が見た象は「江戸持運び困難」と長崎奉行が受け取らなかつた。奉行は遠山景晋、遠山の金さんこと遠山金四郎景元の実父で、幕府要人であつた。オランダ国旗を揚げた二隻の商船が、実はイギリスに占領されたバタビヤで前商館長を雇つた英船であると知つたズーフは、英國船である事が知れたら船も乗員の全ても眼前の砲の標的にされるのみと蘭船で押し通し、売上金でこれ迄四年間の商館維持費を支払わせ、翌年の江戸参府献上品まで確保した。

ズーフの日記に「英國製の織物は我が國(オランダ)のより上等な物が多かつたが日本人はそれを好まず高値は付かなかつた」入札値段の

事である。「オランダ物は一切これ有まじく買入れ置きの古物にても
これ有べきヤ不景氣の時節に罷り越し候は残念」は幸いに外れ、英國
製の上物を安く貰えたはずである。翌年の御用説(幕府注文荷の中に
天文学書一冊(日本の事書し本也)、阿蘭陀筆十本などが入荷したが忠
敬先生の注文品ではないだろうか。

この日より一月後、十月朔日博多呉服町着、二泊され、十一日小倉
着。十二日福岡へ帰る藩測量方山本源助に「国図を貸す。外に村々差
出帳の内を国図と共に(返却する時に)江戸届を頼み遣わす」この村々
差出帳はどう使われたであろうか。私には解らない事ばかりである。
どうやら解るのは忠敬先生の足跡と、江戸期の人々が昭和の敗戦後
我々よりはるかに輸入品に囲まれた文化的な暮らしをしていたことの
みである。

(長崎街道研究家)

伊能忠敬研究会 募金総額 一、〇九四、〇〇〇円
伊能忠敬銅像建立募金拠出者御芳名(最終版)

【北海道】斎藤サダ、斎藤重則、杉村久哉、北栄測量設計㈱

【岩手県】渡部健三

【福島県】石井千寿子

大久保雅子

【埼玉県】井上靖子、加藤巷児、矢能彰、小沢健一、福田弘行

新沢義博、伊能淳、八木勲

【千葉県】土肥規男、大宮信篤、大友正道、香取孝勇、佐久間達夫
朝岡洋子、江口俊子、海保英之、北田明子、安藤由紀子
成家淑子、本郷晴枝、村上昭三、神保弘之、久保木恒雄
小島一仁、香取喜良、神保誠、伊能辰郎、香取秀紀
清水建宇、橋本新治、伊能静光

【東京都】植田浩一、松浦睦夫、伊藤栄子、神戸信和、渡辺一郎
丹羽菊乃、浅井京子、浅井和春、関根秀次、中川幸子
武田威、高橋和夫、渡辺禎子、岡部孝子、阿久津綾子
前田幸子、首藤郁夫、中山翠、長岡道子、荻原哲夫
堀内立三、伊能洋、伊能陽子、島崎恭一、鈴木純子
齊藤仁、山本公之、大庭功、清水靖夫、伊能昌子
村田昌夫、辺見蓉子、坪田外喜雄

【神奈川県】坂本巍、永野達代、秋間実、安藤政璋、栗田義弘
【新潟県】垣見壯一、熊倉健

【愛知県】香取武

【京都府】松田昭二、小林清、平岡佳子

【兵庫県】谷垣忠利、萩原一輝、横川淳一郎
安達正剛、吉井貞俊

【広島県】菅波寛

【愛媛県】菅哲彦

【福岡県】村井純孝、中富道利、石川清一
河島悦子、熊谷要平

【長崎県】平川定美、入江正利

【熊本県】今泉智恵子

タイムカプセル



対馬藩宗家文庫『測量御用記録』(五)

入江 正利

四月八日

今晚星測有之、郷左衛門罷出、目鏡杯見セ被申候ニ付

手代役、郷役人井郡足輕江も御見セ被下候様申述、いつれも

呼候而見セ被申候事

文化一〇年三月二九日(承前)

府中ニ而ハ給仕町子供袴着ニ而相勤ル

田舎ニ而ハ百姓之子供白衣ニ而給仕相勤、一郷ツヽ附廻り

候様、兼而申付置候事

子供を給仕に差し出した例は、ほかでも見られるが、粗相があつたとき、おとなでは申し開きが難いので行われたという。子供に袴をつけさせるのが普通であるが、田舎では白衣で出したという記録は珍しい。郷内を通して同じ子供を使つてゐる。

三月晦日 前日の続き。四月朔日は雨天のなかを、府中の市中を測量した。雨中の測量も珍しい。翌日から二手に分かれ、忠敬には中村郷左衛門が、また、西の手の坂部隊には佐治勝左衛門が附廻役人として同行し、毎日の測量模様を書き留めている。

あらすじは、忠敬の測量日記と大差は無いが、その日の天候や測量経路、賄いや宿の手配、府中への報告等、附廻方の仕事の記録が詳細に書かれている。

四月一日 忠敬の供侍・加藤嘉平治が病氣の為遅れて出立し、馬で駆けつけてゐる。藩が用意した医者が病氣になり、他の医者と交代す

るというハプニングも起つた。

小野直衛殿より御差下ニ付、今朝鴨居瀬ニ而差出ス
勘解由殿へ江戸高橋作左衛門殿手付、吉田栄六郎方より之書状壹封、

四月一二日 天文方・高橋役所類焼の報が届く。

勘解由殿へ江戸高橋作左衛門殿手付、吉田栄六郎方より之書状壹封、
御留守、御別儀無之哉と相尋候處、又兵衛殿方至而

近火ニ而候得共相遁レ候由、勘解由殿ニハ江戸へ留守無之由也
船中ニ而勘解由殿差向キニ内話有之候ハ、某儀ハ元來
下總国刀狩川辺、香取郡佐原村出産ニ而

公義ニ由緒有之、浪人者ニ而式拾ヶ年以前、江戸深川へ
致隠居、伴三郎右衛門儀、五拾歳ニ及候、孫幼少之男子
人材と六才と武人有之、則佐原村ニ先祖譲り之世業
相當居候、某ニハ天文学心掛居、高橋作左衛門死後、跡目
幼若ニ付、内々ニ而後見致し居候内、ケ様ニ国々之御用を
被 仰付同心衆を下役ニ御附被下、内弟子をも御免ニ而
則御家人ニ被 仰付国々を相廻候、口ハ早く相果外ニ
江戸へ留守居も無之候、此御用相終候ハ、高橋家も

當作左衛門、最早成長致し、外ニ間宮林蔵と申豪勇之者も有之、貞兵衛殿とも追々相仕立候故某ニ八年も寄、如元隱居安心之存念ニ而候由、其外彼是内々之咄事も有之、ケ様国々之國相糺候も元來ヲロシヤ・相起候趣等、委曲被申聞

本音がよく出ており、間宮を剛勇の者と称えている。また、四月十三日の記事にはつきのよう出てくる。

今泉殿事 御證文所持ニ而被召仕候身分、内弟子中と同居ハ如何ニ付、明日にも鎌川へ星測り不時泊ニ相成候時別宿之手当申付吳候様被申聞

右之序ニ又兵衛殿（今泉）内話有之候ハ、我々儀江戸ニ而御存知之通、淺草御藏前天文原境内ニ住居致し天文方御用相勤ル事ニ候、国々測量御用之儀、我々相拘候者ニ無之候得共、藤助ニ勘解由殿と被仰付国々相廻り候内國柄ニ依而ハ請方不宜、何角と手入相生し事之

遲滞ニも相成、既ニ一ト先勘解由も江戸ニ引返候様之

儀も有之候、依之

公義ニ而尚亦御吟味之上、我々三人を別段ニ被差加、其以來ハ何レ之国々迎も、能々折合順便ニ御用も出来

申候、段々數年右之如く諸国を巡り年月を経

扱々迷惑なる儀ながら御用之事故、不及是非之由

彼是委曲内話有之

今泉は目立つ男ではなかつたが、我々は従者を連れている身分である。急な泊まりになつたとき、内弟子と同室は困るというのである。そして、自分等が付いてからよくなつたとPRし、我々は測量は本務ではなく、遠国を歩き廻るのは、迷惑なことだが、御用なので仕方ないと述べている。このような下役もいたということである。

中村郷左衛門は順調にここまで役目を勤めてきたが、進物のことで少し困つた問題が起つた。

四月二十六日 晴天 西風

勘解由殿在宿有之

又兵衛殿、謙次郎一手ニ而、海粟島、海老島、三ツ島夫より鬼ヶ崎・鰐浦迄測量相済

一行衆へ朝鮮物被遣之御目録府中より相達候付

郷左衛門持參差出

員數左之通

豹皮一枚

朝鮮大油紙一枚

同 筆五本

充

勘解由殿

朝鮮大油紙一枚

同 筆五本

充

尾形殿

同 円扇三本

充

箱田殿

朝鮮大油紙一枚

同 円扇一本

同 木綿一疋

竿取甚七

朝鮮円扇一本

同 頭巾 壱

充

侍三人

五月五日 端午の祝い。郷左衛門は上下を着用し、進物に干鰯や
錫を持参する。

五月十一日 晴天

勘解由殿方江高橋作左衛門殿より大封之書状壱封

昨夜半府中小野直衛殿より被差下候付、今朝旅宿江
持参、勘解由殿江手渡致し候処、船中二而開封被致

先達而、作左衛門殿役宅自火二而相慎被居候处、
別儀なく御免有之等申來、安心之由被申聞

以上

朝鮮円扇一本

同 木綿一疋

充 中間二人

四月二九日 曇天 北風

昨日、比田勝村二而勘解由殿内話之内、朝鮮物御音物之儀

下拙貞兵衛下役中同様之御目録二而候、何国二而も

座段有之候得共、其儀ハ達而不申候、内弟子共之儀

下役と格段大ニ違候而ハ致迷惑、竿取とハまた

座段大ニ上り候趣被申聞、他国三而ノ御音物帳杯を

見セ被申、其後侍善藏尚又委敷申聞候ハ、たとへハ

勘解由殿ハ十ウならハ、貞兵衛殿ニ七ツ、下役ニ五ツツ、

侍中竿取ニ式ツツ、小者ニハ御見合ニ而、内弟子衆ハ

下役と侍中との間と御用被下候得ハ別儀無之候

扱又、謙次郎別而手分之暮方分ハ御内々勘解由ニ

御自分様御届被下候ハ、善藏迎も難有拝受可仕候
左も無之候而ハ、同勤中之存念を兼候而、御断可申上
外無之趣委曲申聞

忠敬から下役と内弟子の間で、あまり差があつては困るという苦情
である。これには郷左衛門も弱つたと思う。上司へ報告し、次回に音
物の調整がおこなわれる。これも珍しい記録である。

五月十四日

尾形謙次郎より郷左衛門方へ左ノ紙面來

今日も不勝之天気ニ候得共、先御国海辺御用相済
此上之大慶無御座候、是も畢竟貴君様之御手縁
次二手傳方并梵天持人足手傳船等、格外之出精故
奉存候、扱御国海辺ハ八郷同様と申内、與良郷ハ
内外共崎渡数多別而、前後数日相勤力田海物之
業も口（不明）墮奉察一日も早く相済、人々安堵之思を
為致度候付、良介と申合セ致出精候処、漸今日迄ニ
海辺皆済相成申候、十分之思召ニハ相適申間敷候得共
下拙共之赤心余力有之間敷と奉存候、乍併濱海之

居民日々之勤労方干役之苦痛不堪閑見之至

依之賦小詩呈高覽之御一読可下候、以上

人参壱本

北京煙器弐本

松ノ実弐升

割物添

充

右、下役衆三人

仁政雖施未得拘　測量空苦幾人民
火耕水耨皆供廐　親捨兒今不養親

離宮香壱つ

扇三本

松ノ実弐升

右、内弟子衆三人

筆者は漢詩については高校で授業をうけただけで、良くは解らない。しかし、対馬の測量において、尾形謙次郎が人夫達の協力に感謝してしたことだけは確かである。五月一六日には、謙次郎と善藏より繩引き足輕とぼんてん持ち夫へ酒一樽を贈っている。

そして測量を終えて対馬を離れる五月一七日となる。藩からあらためて進物が贈られた。

五月一七日 曼天

五島迄送り之面々、今日上船被 仰付御面謁之節

郷左衛門儀、此度ハ御船奉行相兼候様直衛殿より

御口達有之、乾清土方江も御切紙ニ而御達被成

田舎ニ而追々御目録被遣物、今日夫々現品を以差出

勘解由殿、貞兵衛殿江小虎皮一枚ツヽ、其外品々

朝鮮物相添、直衛殿御名前を以、御郡奉行且御用達

より之遣分ニして、御遣し被下品々左之通

人参壱本

草参也

充

煉紬壱疋ツヽ、内弟子三人

右ハ先達而廻村中、御遣出之節下役衆までハ

豹皮被遣候得共、内弟子衆ニハ無其儀、侍中竿取

松ノ実三升 割物添

右、伊能殿、坂部殿

朝鮮煙器弐本

扇壱本

書画弐枚

充

右、侍四人 竿取弐人

白布一疋

充

右、小者五人

金 壱両

尾形謙次郎

三百疋

勘解由殿侍
宮野善藏

右之面々、東組ニ而小手分一方を相勧別段苦勞
有之候ニ付、郷左衛門より挨拶致し勘解由殿迄内々差出ス

之被遺物ニ等く、内情甚以迷惑之趣、勘解由殿より

郷左衛門へ内咄之次第有之候故、上府之上右之趣

申上置、此節別段右之通被遣之

但、右之品ハ何卒豹皮ニ御替被下候様、品物は悪く候而も、

名目のミ有之候得ハ、難有故吳々内願有之候へ共、豹皮今程

有合無之由及断候而終ニ無異儀相済候事

下役と内弟子のバランスをとるための追加進物である。質が悪くてもよいから、豹の皮にして欲しいと頼まれたが、持ち合せがないので勘弁してもらったという。

朝鮮木綿染地式反充 侍四人
右ハ、附廻之御郡奉行御用達ヘ、菓子代銀拾匁田舎ニ而被相贈
候付、返物として御遣出し被下

のふ帽子拾九

一行十九人江

右ハ、田舎ニ而郷左衛門相用居しを見被申、一統より深々之所
望ニ付、注文申登置、夫々出来居候故、今日郷左衛門持参遣之、
尤品位ハ上中下段々ニ有之候を皆々同付キ次第ニ受用有之

右、いつれも今日郷左衛門持参差出候處、厚く謝禮被申聞
一 追々御遣出し之干看代、菓子代等代金を以、今日御遣出し相済、
宿亭主より差出
一大油紙被遣し處、荷かさの品是より先キ遠路運送迷惑之旨被聞
候人ニハ為代朝鮮木綿染地一反ニ引替、宿亭主より差出ス

眞面目に伊能忠敬の測量について研究されている方々には下世話
なことであるかもしれないが、珍しい記録なので、紹介させていただ
いた。また、この贈り物を見ると、対馬がいかに朝鮮と深いつながり
があるか御理解いただけるものと思う。

この日から風待ちの為に府中で滞船を余儀なくされるが、五月十九
日には宗家御隠居様（この前年十二月に江戸に於いて宗家当主が対馬
守と名を改め、御隠居は式部大輔と改めていた。）の御逝去もあり、
宗家としては喪に服すことになる。

ようやく五月二十二日になつて、快晴順風となり、千年丸にて出帆
して、平戸島田助浦で一泊する。翌二十三日に五島宇久島へ無事着船、
直ぐに中村郷左衛門は羽織袴を着て、忠敬の宿へ別れの挨拶に向かう。

宇久島へ乗り込候處、隼船數艘幕さつすり、船印等
其外測量船之御用意方、宿々之御取設方諸事之

御馳走躰中々御國之御城下旅宿よりも遙ニ美々

敷相見、御旅宿ニ而も御國田舎向之不思赤面致し

候趣、勘解由殿江及断候處、いやいや少しも左様之儀

御掛念御無用々々、我々儀ハ只御用之滞無之處を

専ニ存ル事ニ候、旅宿彼は之御取設ニ不入ル御作事を

被成候儀ハ兼々も申候通、念絶申候対州之儀、遠國故御用

向も如何哉と存候處、存之外無滞、対州程御用之相進ミ

候國ハ他国ニ而無之候、日本國中いつ方成りとも

御向ヒも被成候得、一日一手ニ武里内外ならて海辺之

測量ハ不致事ニ候、左無之ニ而ハ即應之御用諸事之取調
難成候處、対州之儀不廻儀ニ相進ミ、一手ニ三里四里ニも及ヒ

一日三手を合十三四里ニ及候日も有之候ケ様相進候故御自分御案内宣故と一行中ニ而も時々噂致し申候、御馳走向之儀も無残所、御丁寧ニ被仰付何一ツ御氣掛りハ無之候間御心安く思召候様委曲懇ニ被申聞候故、相應ニ一禮申述置候事

それから、中村郷左衛門は直ちに帰府のため乗船し、六月二一日に府中へ着船する。

測量御用記録には、この後の部分に西の手・坂部隊の測量の様子を記している。佐治勝左衛門が四月一日から五月四日迄、その後を、樋口又左衛門が五月十六日の帰府まで記録する。内容は東の手に比べると淡々としており、目立つものがないので割愛する。

その後ろの部分に誰の発案であるか不明であるが、忠敬一行の測量距離を書き留めている。

今度御国中海辺街道筋
公義之御用ニ而測量被 仰付候は絵図御仕立之

為之御用と相聞候、然處御国之儀元禄十三年

庚申二月四日

公義へ被差上候絵図之御扣明細ニ有之分

間等、夫々ニ相立居候事故、当節測量之分此方ニハ扣留メ相写候ニ不及義ながら、日々附廻り候事故

責而ハ其日々測量之里数成り共相記置度

夫ニ付、日々測量之紙札被方算用候得は

海中ニ捨被申候を、札取之足輕より申請候而日々之

測量高を此方ニ扣留候様ニと西組之方ニ而取斗
有之候、東組之儀弟子衆箱田良介被申聞候付
此札ハ只間数を記し候のミニ而方角も無之候故
絵図御仕立之答ニハ不相成候、只日々測量之
里数間数を御写被成候而已之御入用ニ候ハ、右之札
御請込ニハ不及、此方之扣を以日々之分を写し
進セ可申旨被申聞候故、左候ハ、任其意日々
此方ニ而写し取候様ニと申入候へ共、是或之儀ゆへ
彼方より写し可遣とて日々写し居被申候處

四月十六日より以後之写し方相滞一向ニ東西
御国中之分を不残写し進可申との儀ニ而左之通
良介相写し被呉候事

西の手では参考のために、野帳への転記が終ると海に捨てられる手札に書かれた測量データを毎日写していた。東の手（本隊）でも見せてくれるよう依頼したら、内弟子・箱田良助が距離だけでは分るまいと、方位も含めてデータの写しを呉れたという。東の手、西の手の測量距離を写し、記録にとどめている。

伊能隊は、はじめは、付き添い藩士にも測量結果を知らせてはいけないというきまりで行動していた。これらは明らかにルール違反である。この頃になると、良く協力した地元に対しては希望にそなつていたのかも知れない。そして、朱書で次の記入がある。

壹州ニ而御役人を待請候内ニ持越之御国絵図ニ寸分を当テ候
測量高ハ武百拾七里と五町程也海辺島々共ニ如此
御役人衆惣測ニハ七里餘不足ニ候事

これは前述の元禄国絵図を中村郷左衛門が壱岐で計測した数字との比較である。測量距離の写しで、測量御用記録參番は終わりとなる。よく比較される対馬の元禄国絵図の精度はこんな感じだった。

四番は御役人衆へ差し出した諸帳面等の控えを集めた物である。すべてが、忠敬に渡された物ではないが、中村郷左衛門が苦労して用意した質問状や八郷の書上、それに元禄国絵図から計測した資料、延喜式内の神社帳で構成されている。現在では不明の神社も記載されており、この当時の生活の様子がわかる貴重な史料である。相当な規模のデータなのでここでは記さない。

五番は今で言う経費明細帳である。府中と八郷について、それぞれ細かい項目について人数や馬・船・いろいろな材料、食糧それに対する支払いを記載してある。科目別に眺めてみよう。

測量方附廻船拾五艘	壱艘四人乗ニして
羅鍼船 式艘	中取船 式艘
跡繩船 式艘	先繩船 式艘
乘替船 壱艘	梵天船 式艘
右同断、付廻り人夫六拾人	札取船 式艘
梵天持 式拾人	臺持 四人
床机持 四人	箱持 参人
幟五本持夫 五人	大杭持 壱人
引廻道具持 壱人	薄縁毛氈持 式人
間竿持 老人	両掛け 式人
替繩持 壱人	鎧持 壱人
茶弁当持 式人	茶弁当持 式人

草りわらし、傘持 壱人 駕籠夫 六人
地名案内者 参人

手引 参人

小隼式艘 水夫拾式人 壱艘六人乗ニして
付廻 乗馬六疋 海陸測量共二日々備ニして

御役人用 参疋 御郡奉行、御用達、御郡手代 参疋

御宿亭主 参人

宿人足 式拾五人

御旅宿三軒ニ而 拾式人 掃除夫 四人 賄方 六人

御役人股引、足袋、衣類等洗もの用 女夫 参人

通子供 九人 御旅宿用三軒ニ而

飛脚夫 参人

増火番 式人 此者を以、貝吹不寝番用共ニ相兼ル

但、右之口々ハ日々定式備ニ相成候分

人夫 五拾人 御役人荷物、歩行持用二當

乗馬 五疋

御勘定手代 壱人、御郡手代 参人、町医 壱人

荷馬 五拾式疋

御役人 賄方 御郡方 御郡奉行 御用達—御厩之者共ニ

御郡手代 附医 御郡足輕走番共ニ 繩引郷足輕

等之惣荷物送り二當テ

但、右之口々ハ陸地・村移リニ限、入用之分

荷船 拾七艘 壱艘五人乗ニして、諸荷物送り用

荷積夫 参拾人

茶弁当持 式人

以上が、八郷ともに平均的な数字である。一応、集計途中の数字が書かれていて、筆者が最終の数字を試算してみた。

人夫合計 五六、九八一名

米合計 一九一石五斗六升五合

銀合計 一貫目六八四匁三分四厘二毛

船合計 一二、二四九艘

馬合計 一、五四二匹

滞在日数 五三日

測量距離 一、一四七・五キロ（忠敬の測量日記惣測の合計）

以上が伊能忠敬の対馬測量御用記録のすべてである。ちなみに長崎

県の

全測量日数と距離は測量日記によると次のとおりである。

滞在日数 三一六日

測量距離 四、八一一・一 キロメートル

最後に気になる事をひとつ。最後の五番 経費明細の中に、

一 燃酒六升三合 壱升二付、銀武匁武分五厘替

代銀拾四匁壹分七厘五毛

但、東ノ手御役人衆内弟子より泊之村ニおゐて

折節所望有之候節、御宿へ相附置候、御郡

足輕へ被相頼候節、調遣し置候分如此

東の隊で時折、内弟子から頼まれたが、その分は宿につけてある。郡足輕へも頼まれた分があり、立替になつたものがこれだけあるとい

う。東の手は忠敬の本隊である。酒は御無用の厳しい約束であつたが、多少は所望した者があつたことが分る。他でも記録があるから、内緒で飲むことはあつたろう。

対馬の測量記録が漸く終わりました。筆者は古文書については初心者です。見落としや誤読があるかもしれません。その時は御容赦と御教示を御願いいたします。

編集部 注

印刷して一七〇頁を超える大冊の対馬藩宗家文書の伊能測量記録に一人で挑戦された入江正利会員の熱意に心から敬意をします。本文書には伊能測量についてのこれまでの知見を修正する必要がある重大な事実がいくつか含まれております。

筆者も述べておりますが、解説文には理解できない部分も若干あります。しかし、余り長引いてもいけないので、今回はこれで終了します。

編集部としては、できるならプロジェクトを組んで、他日厳密な校訂をおこなつた上で、宗家文書『伊能測量記録』として、記録の全文を、別冊「伊能忠敬研究」として活字化したいと考えております。御関心のある方は手を挙げて下さい。

伊能忠敬の江戸在住日記 (七)

佐久間 達夫

第八回目の測量となつた九州第二次測量を終つて江戸帰着の日からの江戸在住記録である。

原本 忠敬先生日記 五〇

文化一年(一八一四)五月二日

曇天 六ツ後新座郡大岡源右衛門御代官所伊賀者跡地白子村出立、昼休板橋平尾町伊勢屋佐兵衛、夫より無測にて帰宅

五月二三日

曇天 午後晴 五ツ半過出宅、表向江戸表着に付、御届並びに御証文と御遠鏡持參、麻上下着、弟子共も召連れ高橋家へ相越、下役中永井、今泉、門谷出立、高橋に逢談、御証文壹通御遠鏡一箱返納相済、それより我等ばかり小普請組頭浜江新之助へ罷越、今日江戸表着之段申達、津田家へ立寄、それより堀田攝津守殿へ罷出、當時支配松平石見守殿へ罷出、着御届け申置、七ツ時過帰宅

これまでの帰着どちらがつて、到着即ち正式な挨拶をやめ、まず自宅に落ちいてから、翌日正式に帰着したことにして、お証文と借用した道具を返し、組頭領主、堀田攝津守、小普請支配に届け出た。沿道などに旅行用

人馬の提供を要請できる権限を認めたお証文は、このようないい。ただ、先触れに添えて廻状として出された享しは伊能家に伝えられており、村々の記録としても多くが残つてゐる。

同 一四日

朝曇 四ツ頃より晴 五ツ半頃出宅 八丁堀亀島桑原隆朝明屋敷に参り一覽、家内普請手入れ等の差岡に及び、直に九ツ時前帰宅 渡辺清蔵、下河辺政五郎来る

同 一六日

朝曇 夕後晴 八ツ頃出宅 高橋家へ相越、兼て伺置候國々領主より贈物、並びに目録等の儀同済の旨種々御用談等相済、六ツ半時頃帰宅

同 一七日

晴 六ツ半頃出宅 麻上下着用、国産並びに目録、國々領主より贈物為札、口上書手札持參左之通り相越す

鉄砲州五嶋大膳殿、天文方洪川助左衛門へ立寄る芝畠留奥平太膳太夫殿、同新錢坐御造(力)建内桑原隆朝宅立寄り、同新馬場薩州侯、札之辻久留鳴伊与守殿、赤羽根有馬侯、三田小山島津淡路守殿、芝新堀黒田甲斐守殿、麻布新町秋月佐渡守殿、青山窪町松平志摩守殿、麻布六本木五嶋彈正少弼殿、芝切通し水野和泉守殿、愛宕下十方大和守殿、同数小路相良志摩守殿、同所相良志摩守殿同居米良主膳殿相良家之定にて手札差出申候、しめて十四軒廻勤相済七ツ時前

同 一八日

晴天 六ツ半時前出宅 昨日之通り礼廻り左の通り

吳服橋内細川侯、同所松平丹波守殿、大名小路松平周防守殿、同所松平因幡守殿、数寄屋橋御門内松平主殿頭殿、山下御門内松平肥前守殿、日比谷御門外松平大膳太夫殿、新橋之内亀井隠岐守殿、麻布谷町古田彈正大弼殿、南瓜(話力)御門内三浦志摩守殿、南爪(ママ)御門内内藤象之進殿、霞ヶ関松平備前守殿、長田馬場大村上總介殿、赤坂御門内松平出羽守殿、四ツ谷御門内松平佐渡守殿、神田橋内小笠原大膳太夫殿、しめて十六軒、不残相勤め七ツ時前帰宅

同 一九日

朝曇 午後日曇 六ツ半時出宅 平服にて支配松平石見守殿為対策罷越、組頭浜江新之助殿へ

も可罷越處、同所にて面談に付宅へ不來越尤八丁堀亀島桑原隆朝跡借地之儀、五十坪借受候方可然旨に付、其段地主長田備後守組与力藤田熊太郎へ申遣置

(但実は百八十坪程の借地に候得共、最初より多く申立候も如何に付、表向計五十坪の積り也) □□□(小普請力)世話役

神田お玉ヶ池三丁目町 村田忠次郎 それより麻上下着、下谷御成小路石川主殿守(ママ)

殿、下谷七軒町立花左近将監殿、向柳原宗対馬守殿、鳥越松浦肥前守殿相越九ツ時前帰宅 但

今日迄にて礼廻り不残相済

一、細川家、池部長十郎方よりかねて借置候書物國許より相返し、江戸留守居方より以手紙差越す

いつもながら、すごい挨拶回りである。第八次測量は九百日を超える大旅行だったから特別だった。副隊長の坂部を五島列島で病氣のために失っていたから、手分けして廻ることもできなかつた。

たいへんお世話になつた三人目の妻お信の父・桑原隆朝も、この旅行中に没して、代が変わつた。副桑原の屋敷跡を地図作業場として借り受けることにして到着三百日に見分して、工事の指図をしている。

最終的な地図立てには隠宅では手狭なので、適當な場所を手紙を出して探させていたのだから、間に合つてよかつたともいえるが、真つ先に報告していた桑原の跡地では、心中の思いは複雑たつたろう。

しかし、彼には感傷にひたる余裕はなかつた。つぎつぎに処理しなければならない実務があつた。百八十坪の土地を五〇坪といつて借りたり、造作をさせたり多忙である。

六月 胡日 朝雲 午後曇 晴其后雨 会田算左衛門

同 三日 晴天 我等深川より亀島へ引越す

地主へ見舞 永井甚左衛門来る 伊豆七島の札

普通の日の八幡宮参詣は珍しい。遠慮測量元結のお礼参りか。三日には亀島町に引つ越す。あと三年余りのうちに、ここで忠敬は息をひきとり、終焉の地となつた。

同 四日 終日曇天 鉄之助、加納屋治兵衛

関場乙石衛門、手島伊左衛門出立
五日 曇 晴 我等浅草へハツ後より行く

夜帰る 永井、今泉、門谷来る

賜物 鯨一籠 雲丹一壺 古屋右衛門允並書状一通

同 一〇日 終日曇天 大村侯門人市瀬税（ママ）右衛門、橋口幾三郎来る入門肴並びに金百疋ヅツを贈る

同 一四日 晴 曇 今日借地替願本書とも一通相認め世話役須藤甚右衛門方へ差遣す。明日組頭渋江新之助方へ差出候趣、弟子掛合来る

同 一五日 晴天 山王祭礼 今四ツ半時頃、我等借地替願之通、支配松平石見守被承届候旨、組頭渋江新之助方より以手紙申来る、即ち請書差遣す、右に付八ツ半時頃出宅、松平石見守殿組頭渋江新之助方へ借地替願之通相濟有難趣礼に罷越し、七ツ半時前帰宅

同 一六日 終日晴 曇 大村侯留守居宇津美助三郎来る 悅右衛門、郁三郎、我等方へ引門入頼之儀に付来る 世話役須藤甚右衛門来る 逢談 且引移届

之儀、三・四日過て組頭渋江新之助方へ口上書を以名代届差出候旨及掛合 高橋作左衛門殿、渋川助左衛門殿来る 逢談 足立左内来る

六月 一二日 朝 曇、四ツ時より晴 浅草御手附朝

比奈定右衛門、下河辺、今泉、梁田来る

同 二三日 朝 曇 松平備前守殿留守居大野弁左衛門へ（國許届物之品差越候様、並びに移宅の儀申遣す。広間取次中西多右衛門、松平中務大輔殿國許須坂代官林庄兵衛方へ国図写代金三両）朱五歩簡添て國許へ送る。江戸へ取次留守居山田庄兵衛へ手紙遣す

同 二四日 晴 曇 今日借地替願本書とも一通相認め世話役須藤甚右衛門方へ差遣す。明日組頭渋江新之助方へ差出候趣、弟子掛合来る

同 一五日 晴天 山王祭礼 今四ツ半時頃、我等借地替願之通、支配松平石見守被承届候旨、組頭渋江新之助方より以手紙申来る、即ち請書差遣す、右に付八ツ半時頃出宅、松平石見守殿組頭渋江新之助方へ借地替願之通相濟有難趣礼に罷越し、七ツ半時前帰宅

五月末に帰つたばかりであるが、暑中見舞いに諸家を訪問する。見廻（みまい）は、見舞いと同語として使われる。そのときは（みまい）で、（みまわり一見廻り）とは書かない。近藤重蔵が借りた朱印帳九冊は、忠敬の社寺朱印帳か。全国有名社寺には丁寧に参拝しているから、朱印集めも考えられることがある。

同 一八日 朝曇 昼後晴 組頭渋江新之助へ以
書付借地替引移として御届書二通、
名代門人保木敬藏差遣す、用人小暮
半平受取る由、唐津田口弥二郎来る。
同 一九日 終日曇 大野弥三郎来る 色々細工
物談す。

同 二一日 終日雨 大村内、悦右衛門、郁二郎、
今日より引移る。

同 二四日 曙晴 津輕侯内山川八郎左衛門孫來
る 青木善兵衛来る 板鼻小野良佐
(スケ)来る

同 二五日 晴 桑原隆朝来る 侍加藤嘉平次來
る 須藤甚右衛門来る かねて内談
申置候、佐原村せがれ病死御届の儀
此節死去いたし候段、佐原村より申
來り候趣届書案文差越候に付、明二
十五日御届書差出す僕と申合せ置く
渋川助左衛門殿入来る

同 二六日 晴天 今曉、下總国佐原村より性二郎右衛門病
氣の処養生不相叶、去る二十四日亥刻死去いた
し候段申來候に付、定式の忌服相請候、尤、残
日数十八日の間、服八十八日の間相受候趣、今
届書差出す 用人相受取候段申聞る 右に付今
日忌中に相成候間、其段届書高橋家へも差出す
案文同様の事 御届書左之通り (中略)

○ 口書 見出し

伊能勘解由

私美子總領、下總国香取郡佐原村長百姓伊能
三郎右衛門病氣之処、養生不相叶、去る二十四
日亥刻死去仕候段申越候 書状今曉到来仕候、

依之定式之忌服残る日数左之通り 忌二十日、
残日数十八日、六月二十六日より服九十日 七月
月十四日より残日数八十八日 (六月二十六日より
九月二十六日迄)

右之通御届候、此段御届申上候 以上
戊六月二十六日 伊能勘解由
上包半紙相かけ、届書日向半切に認む
見出し、忌服御届 伊能勘解由
右之通り一通相認め持參いたし候 渡辺清藏
来る

伊能勘解由

忠敬の長男量敬は、第一次九州測量中の文化二〇
年六月七日、四八歳で病死したが、病没していたが、
測量中のため、帰國後病死届けを出し、文化二年六
月に喪に服する。届けを出して期間を半減にすること
ができたので、続いて半減の手続きが始まる。

同 五日 晴曇 昨日迄にて半減忌相済、右に
付御免之旨高橋より被申渡候に付き、
今朝名代を以つて組頭渋江新之助殿
へ届書差出す (届書省略)

同 七日 晴天 当賀 今日佐賀候付廻り渋江
順四郎、江頭伊兵衛、荒木丈右衛門、
東島平橋方へ茶碗之儀に付書状差出
す

同 九日 晴天 四ツ時下河辺政五郎出勤 伊
豆国島々渡海同儀書付下河辺持參
御使 (力) 川口勝次郎新に出勤
一〇日 曙天 川口勝次郎今日より出勤 蝙
節一連贈る 侍嘉平次在所より戻る
同 一三日 曙天 飛彈国高山止宿鍵屋与作方よ
り以書状、かねて貸置候国四枚相
返す 名産信山の紙折贈る 今明日
両日御用調盆休 悅右衛門、幾三郎

同 二九日 町四丁目村田七右衛門
曇 市野金助来る

山中忠左衛門は、測量に専心を持ち、門人となつ
て忠敬経由測量器具を購入している。第五次測量で
は浜名湖附近で測量に従事し美地修練も積んでいた。

より中元付届 金壺両贈る

高山の宿で国絵図一枚を貸してあつたのが返つてき
たとある。地図や資料の貸借はところどころであった
し、伊能家に国絵図の借用証が残つてゐるから貸し借
りはあつても、おかしくないが、国絵図は膨大なもの
なので、どのくらい持ち歩いていたのが気になる。

見出しの通り二通り相認め、支配松平石見守殿
へ罷越、御届書差出す。それより組頭渋江新之
助殿へ相越、同様御届差出し、それより高橋家
へ参り逢談。伊豆国測量之儀申合帰宅 九ツ半
過 但坂部廟参

同 一六日 雨 内弟子は昨日より今日両日盆

同 一八日 晴 午後曇 下河辺より出役愛（挨
休 力）拶心に而、着一箇贈る

同 一九日 曇 折々大雨 二百十日の危日

同 二〇日 朝曇 延岡侯猪狩庄左衛門殿へ用状
返書差遣す

同 二三日 曇晴 吉川監物家來湯谷八十八来る
今日嫡孫承祖頼之儀に付、世話従（マ
マ）須膳甚右衛門方へ名差出す

同 二四日 晴天、黄昏雨 正作佐原村へ出立

同 二〇日 雨或曇 今日藤田へ当月分地代金壺
両遣す

同 八月 朔日 曇、午後晴 賀日に付、御用一統休
み

同 二日 曇天 黒田藤吉来る 写物出来に付、
其備遣す

同 三日 曙 飛彈会所、日本橋北鞘町山師田
中屋半十郎方へ飛彈表便宜之儀問合
せに手紙出す 古屋石衛門允書翰至
(ママ) 来

同 四日 朝曇、夕小雨 吉川家士湯谷八十八
来る 小方位雇金、コンハテ (ママ)

○見出し、せがれ忌明御届
伊能勘解由
私せがれ之忌、昨日迄にて明け申候 今日より
出勤仕候 依之御届參上仕候 己上
七月十五日 伊能勘解由
右通り日向半切りに認め、上包半紙打懸け

コンバスか) 料差置預置 例月の御
扶持米代金今泉より受取る 今夕妙
萬佐原より来る 直次郎同断
五日 朝曇天、午後雨 昨日濃州岐阜岡田
半右衛門、広江彦藏手翰至 (ママ)
日飛州高山・鍵屋与 (力) 作方へ国
岡壺冊、能登風土記相返す 田中屋
半十郎方へ返使の節届け吳候頼み
來 応元曆一冊、南鎌壺片贈る 今
月 朝曇天、午後雨 昨日濃州岐阜岡田
半右衛門、広江彦藏手翰至 (ママ)
日飛州高山・鍵屋与 (力) 作方へ国
岡壺冊、能登風土記相返す 田中屋
半十郎方へ返使の節届け吳候頼み
手紙遣す
同 八日 晴天 渋川助左衛門殿へ此度手附手
伝曆作御用中被仰付候仁、壇堪左衛
門 (力) 聞来る
同 九日 晴天 今晚五ツ時過より橋口、一ノ
瀬両人屋敷より今日大村御隠居様御
病死の由の使來り行く 一ノ瀬は昼
頃其事に預らず參り居り口 (一字不
明)、郁三郎老人罷越
同 一〇日 晴天 今朝五ツ時より道中御切米為
請取御勘定所へ今泉、門谷両人出る
御金持人、家來一人弁当持參差遣す
七ツ時頃受取相済

御切米 (おきりまい) 廉米取の旗本・御家人が受
取る俸禄米のこと。知行の俵高を春・夏に四分の一ず
つ、冬に二分の一、江戸浅草の幕府御藏で受領した。
ここでは、測量の扶持米を指す。

同一日 雨 筑前源左太夫、山本源介より以
書状借置候大画図五枚相返す 取次

同侯留守居大野弁左衛門より添手紙
来る(以下五行中略 地元の記録に、忠敬
から国絵圖借用のことが出てくる。その返
却か)

同一日 雨 小普請御藏手形世話人、飯田町
中坂近江屋半十郎例年差出す切支丹
宗門改書付手形、先方より認め印形

書判取に来る
切支丹宗門、從前々無懈怠今以相改申候先年
被仰出候御法度之趣 家來下々至迄遂穿鑿(セ
ンサク)候處、不審成者無御座候

依之家來譖代之者は寺請状私方へ取之、年
季居之者は請人方へ寺請状取置申候段、請状に
為書入召抱申候 若相替儀御座候ば急度可申
上候 為其仍如件

伊能勘解由
印形書判

文化十一甲戌年八月 洪江新之助殿

八月一三日 晴中、午後雨 悅右衛門胸痛に
付養生の旨屋敷へ逗留 永井不快に
付今日より不來

同一日 晴天、午後晴 田口弥三郎来る 大
画図五枚借す 郁三郎今日より来る

湯谷八十來る 磁石屋金遣す
同一日 晴天 五ツ時過出宅 大村侯へ御悔
に出る それより山田助石衛門方へ

行く 林大学頭殿へ出る 七ツ時前
帰宅

同 一八日 晴 大須藤甚右衛門方へ門人保木敬
藏差遣し、兼て申談置候心願之儀、
願書差出候儀問合候處、最初取扱候
同役芝森本小沢權右衛門へ掛合可然
旨被申聞候

同一九日 晴 永井痛所快り出勤 川口妻御乳持に
付不參

同 一七日 快晴 駿河台屋舗小堀中務殿手代へ
京都人見唯右衛門へ書状頗遣す 右
は算盤七挺逃代金二両零分小谷平兵
衛へ差遣す 元メ田代真平留守に付、
恵得兵衛へ相渡受取書取置

一、竹千代君様御逝去に付十日の間鳴物停止の
事 来月六日迄

同 夜子中刻、竹千代様御逝去に付、洪江新之
助殿より左の廻状 北八丁堀 永(方)島町
家主孫兵衛店石渡辰次郎より到来 子中刻 北
八丁堀近藤磯石衛門方同居伊藤砂之助へ順達す

土井大炊頭殿被成御渡候御書付写

竹千代様御逝去に付普請は来月朔日迄、鳴物は
同六日迄停止候之間得其意可被相触候
八月一六日、御同人御口達大目付
竹千代様御逝去在に付、公方様、御台様、御定
式の通り、今日一日御遠慮被遊候 大納言様、

御廉中様には御定式の通明後一八日迄二日御遠
慮被遊候事。(中略)

同 一八日 晴 平田次郎八入来(九州第一次測
量の際の薩摩藩付きまわり役)
同 一九日 晴 須藤甚右衛門入来 心願の儀談
す

九月 胡日 晴 今日小普請世話役小沢權右衛門
へ敬藏差遣し、心願の儀相談す 普
請停止今日迄にて済

同 一二日 晴 秋父大官 井上治右衛門方より
嶋屋使を以て申遣し置候生絹都合十
三疋來る

同 四日 晴 伊東隨二老人來 赤水図国(マ
マ)貸遣す

同 九日 晴天 高橋家へ參る
同 十日 晴天 宇(ママ)小の誤り)沢權右衛門
方へ保木敬藏差遣す 此間中相談の
通り心願書添書、並びに例書持參の
事別帳へ委記す

注 本編以降、佐久間氏の解説文に、渡辺と、伊
藤栄子氏で若干加筆させていただきましたことにし
ました。

源空寺に景保墓は二基あつた！

永野達代

誰が源空寺の忠敬墓を建立したか

もうすこし忠敬墓にふれてみよう。

- ・文政元年（一八一八）旧暦四月忠敬没 孫忠誨数え年十三歳
- ・同年六月忠誨の母りて没
- ・同年十一月忠誨の弟鉄之介没
- ・同四年九月忠誨の喪を発する
- ・同五年八月忠誨の伯母妙薰没
- ・同年十一月忠誨（十七歳）佐原に帰る
- ・同年末佐藤一斎による墓碑文成る
- ・同六年四月墓碑建立

伊能家に石屋から高橋、浦野宛の請求証、領收証が残されている。たとえ景保等宛であつてもそれが伊能家にあるということは、費用は伊能家が出したことである。

復興計画

福岡峻治著『東京の復興計画』日本評論社

前に佐藤一斎への撰文の依頼がなされていだらう。また、高額な請求証を歳若い忠誨にまわしていることから、妙薰をふくめ関係者の間でおおよその建立費用を承知していたと考えられる。

娘妙薰としては仮の墓（おそらく忠敬とわかる文字は刻まれていなかつたろう）から一日も早く立派な墓の下で父親を眠らせたかつたであろう。喪を公表してから妙薰自身が景保等に相談しつつ墓の建立の

準備をすすめたと考えるのが自然である。（この時点では師よりも大きい墓石ではなかつたと思うが）しかし完成を待たずに妙薰自身が逝つてしまい、ただ一人遺された忠誨は佐原へ帰る。そして景保を中心とした天文方が仕切つて墓を完成させたと私は考える。

会報十一号18ページに石屋「いつみや」の領收証が幸い現代語訳付で載つてある。金拾六両三分式朱ト錢式百五文の請求に対しても拾七両支払われ「つり錢之儀私方へ御預り申上候」と書かれている。この時代の送金方法を知らないが、つり錢を手渡せない状況、つまりなんらかの方法で、佐原の忠誨から直接送金されたのではなかろうか。

ついでにおせつかいながら至時の墓の建立費を誰がだしたかみてみよう。まず至時のお目見初登城のさいの支度のいつさいの面倒を忠誨がみたことは有名である。至時の墓を建てる立場にある景保も父と同じ薄給であった。その上書籍代など研究費もかさむ。『高橋景保の研究』によると景保は忠誨が測量で不在中も景保や妙薰に無心をしていたそうであるから、もつと小さくごく一般的な墓を建てたであろう。一役人にしては立派すぎる墓碑は忠誨さんの師へのおもいが込められたモノументのように感じられる。

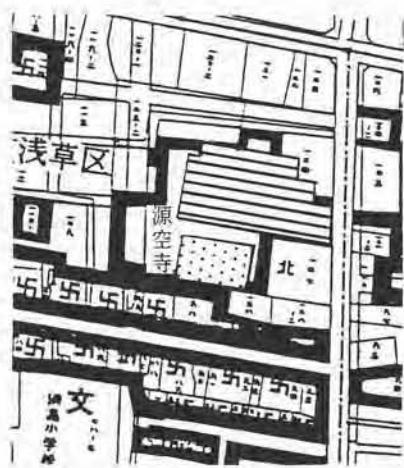
・墓地の2／3は（東京）市有地で墓地を郊外に移す計画のため明治

二十二年より市内の墓地の新設改葬は許可されなかつた。

大正十二年の関東大震災を契機に翌十三年特別都市計画法が成立し復興計画が動きだすが、復興局は寺院境内地、墓地を除斥地、つまり手をつけないこととしたので（図1）一般住民は納得せず、地区代表の区画整理委員たちは源空寺近くの矢崎稻荷神社でしばしば会合をひらき、ついに

・墓地の移転・整理には一坪平均二五円以上の移転料を交付する。
・区画整理に参加し、復興上必要があると認める国有境内地は当該寺院に払下げる。
　　と言う内容をもつ寺院境内地の整理地区強制編入の法律制定を実現させてしまつた。住民運動のはしりだわな。
　　そして源空寺のど真ん中を道路が貫くことになる。(図2)
　　大正一四年から墓地の移転・改葬作業が始まる。

四



除斥地（寺院及墓地）
■■■（著者作成）
源空寺現在の寺域
■■■（著者作成）
源空寺現在の墓域

大山斐磧齋編
土地収画整理予定図

帝都復興圖画

除斥地
(寺院及墓地)

源空寺現在の寺域

源空寺現在の墓域

图2

換地位置決定図

東京市役所編

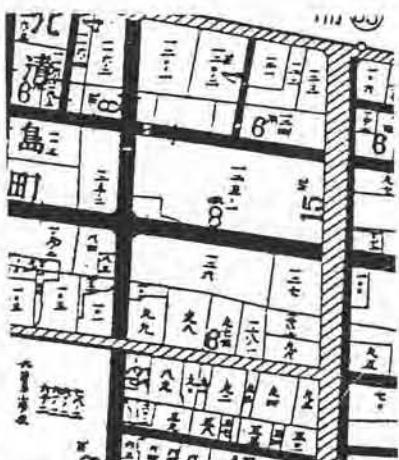
多理志

2

道路（旧道）

1

道路
(新設)



源空寺に景保墓は二墓あつた

吳秀三著「シーボルト先生」吐鳳堂書店 大正一五年刊

上原久著 高橋景保の研究 講談社 昭和五一年刊

この一冊の本から墓の部分をまとめてみる。

我々が承知している高橋景保の墓と頌徳碑は

以外はわからないそうである。

頌徳碑は戦火で崩れ落ち、後にセメントで修復されている。背面は

ら書き写してみる。

第一段はドイツ文で第二段に横書きで訳文が彫られている。

余が此海路の詳細なる形図と多少水路学的観察とを報ずることを得たるは、吾等の同行せる日本人の好意と下関の友人の援助、殊に余の忘れ得ざる援護者たる幕府天文方高橋作左衛門に感謝せざるを得ず。

—シーポルト—

長崎 小沢敏夫訳

第三段は碑建設の趣旨が述べられている。

先生逝イテ百七年、墳墓壊滅に委セ、久シク祭祀スル者ナキヲ

嘆ム。乃チ賛ヲ捐シテ改修シ、側ニ一碑ヲ建テ、頌徳ノ文ヲ刻ス。

一ハ遺徳ヲ偲ビ、一ハ功績ヲ永ク世ニ顯彰セシガタメニ

纂額ハ徳富蘇峰翁ノ題スルトコロ、文は中山翁ノ撰、書ハ山北寛

山翁、背面ニ刻ムハシーポルト所著「日本」中ヨリ小沢敏夫君之ヲ抜録且ツ訳スルトコロ、因ツテ其ノ由ヲ記ス。

昭和十年二月十一日 八木史郎謹記

八木氏をしてかくも嘆かしめた状況とはどのようなものだったのであろうか。

時代は遡る。万年橋の決から出航したのであろうか、遠島に処せられた景保の二人の息子、長男小太郎景僕（二十五歳）次男作治（次）郎

または賢次郎景福（二十四歳）は九年後に將軍家治五十回忌の特赦で江戸にもどるが景福は翌年死亡、小太郎景僕は天文方に召し出される。

景保は存命であれば死罪であつたから小塙原の回向院に葬られたのだろうか。それとも塩漬けにされた（そこまでしなくてもいいじやないか）遺骸は遺族に引き渡されたのだろうか。

其の時源空寺には父至時の墓のほかに、忠敬が没した翌年文政二年に亡くなつた景保の娘の墓があつた。次男景福はこの墓に入つてゐるから、もし遺骸を引き渡されたのであれば、景保もここに葬られた可

能性が高い。

いろいろ資料をあたつてみたが罪人の墓は一般の寺にはつくられなかつたとある。

しかし高橋家は大阪より源空寺に菩提寺を移し、初代（享保六年1721五八歳で死）から四代と、五代から七代景保（信貞院殿保譽觀巣昌命居士）までの夫妻の戒名を刻んだ「高橋累世墓」を建立している。長男景僕の墓は独立してあるので、これらは景僕によつて行われたと考えてよいであろう。

しかしこの「高橋累世墓」は『シーポルト先生』に高橋作左衛門景保の墓の写真の説明として「大正十二年大震災に破損せるを取集め撮影せり」とあり、震災時の火災によつて大破してしまうのである。

震災時、源空寺に高橋家の墓は至時墓以外に「高橋累世墓」とほかに四基があつた。

景保の子孫は『シーポルト先生』に

長子小太郎景僕 — 橋太郎景久 — 橋太郎景永

— 橋也（戸籍上吉彌）

とあるが『高橋景保の研究』の著者はこれに疑問をなげかけて

景僕 — 景久 — 鎌太郎

— 景永 — 吉彌

と推定されている。

次ページ写真の中央の舟形光背をもつ像是初代の娘（宝永四年1707没）の墓といふことなので、わざわざ大阪から移していることを考へると高橋家の守り本尊のようなものだつたかもしれない。『高橋景保の研究』では童女像としておられるがおそらく愛らしい觀音菩薩像であろう。高さは台座をいれて108センチある。

左から二番目が「高橋累世墓」である。蒲鉾形をしていたらしい。

向かって右端は景保の長男八代小太郎景僕の墓で大震災で受けた激しい損傷が見てとれる。向かって左端の墓には中央に景保の娘、向かって左に景保の次男景福、右側に景僕の妻、左側に十代鎮太郎、右側面に景永の戒名がそれぞれ彫られている。

『シーボルト先

（1）上原久著「高橋景保の研究」昭和五二年刊より

生』に「吉彌は

近頃迄三輪火葬

所手前五十軒長

屋に居りしが、

今は所在を明に

せず」とある。

この本の初刊は

明治二九年であ

るが、前出、写

眞の撮影が震災

後とわかるので

大正十五年刊の

時に書き加えた

とみてよいであ

ろう。

『高橋景保の研

究』で著者は

「源空寺住職角

田大雲師によれ



ば一昭和四七年三月一三輪に居住していた吉彌氏は震災まで墓参して
いた由であるが、以後高橋家ゆかりの人の墓参はないという。関東大
震災を以て高橋家は断絶したのである。」と結んでいる。

震災、戦火で

（2）平成十三年十月筆者撮影

過去帳は焼けご

住職も代替わり

し、此等が至時

の子孫の墓とい

うこととはもう寺

側も御存じない。

墓域の四隅に

光背を付けた仏

像が墓を守護す

るよう配され

ている。高橋家

の童女の観音像

は、けなげにも

東南の角でその

一翼を担つてい

るのである。

源空寺に吉彌

氏の墓は無い。



その後の「伊能ウオーカー」

中山翠

花のお江戸の凱旋パレードから一年たって

二〇〇一年一月一日の寒風吹きすさぶ星下がり、三千八百名にふくれ上がった伊能ウオーカー隊は、出発地の東京に帰着しました。

一九九九年一月二十五日から都内の五街道ウオーカーを行い、二八日には東宮御所前で皇太子ご夫妻に激励のおことばをいただき、翌二九日、両国の江戸東京博物館で出発式を行つて、千葉県に向か旅立つてからこの日まで満二年。四七都道府県一萬一千三百を一筆書きで踏破しました長旅でした。また、大内惣之丞隊長以下十五名の本部隊員を中心として、延べ十七万人の参加者を数えた破天荒なスケールの旅団でした。

銀座通りと直角に交わる晴海通りでは、三原橋からゴールの日比谷公園までの一キロほどを、警視庁ははじまつて以来初という、一車線を封鎖しての大パレードで行進。紙吹雪こそ舞つてはいませんが、まさに花のお江戸に凱旋入城したような晴れがましさ。伊能ウオーカーがあたかも「国民的行事」として認知されたような誇りと高揚感。大きなイベントを完成させた充足感などが交錯したものです。

女性だけのマーチングバンドを先頭に、加藤剛名誉隊長、マンガ家のサトウサンベイさん、本部隊員が紺・黄・赤の旗をもつて続き、ステージ隊員、エリア隊員がそのあとに続きます。それからは主催、後援、支援団体などが「連(れん)」を組み、カラフルな帽子やウオーキングウエアに身をつんで続くのですから、新世紀の元旦にふさわしい一幅の絵巻物のような光景でした。

日本ウオーキング協会(日歩協)、伊能忠敬研究会、イノーウオーカークラブ、伊能家の郷里千葉県の佐原市、九十九里町、横芝町、朝日新聞社、全国測量設計業協会、日本土地家屋調査士会連合会など、みな伊能ウオーカーがお世話になつた会社や団体の方ばかりです。渡辺代表はじめ当日参加された多くのみなさまには、「このときの感慨を共有していただけた」と思ひます。

翌一月二日、伊能ウオーカー隊は佐原市を訪れ、佐原市民と記念ウオーカー後、解団式を行いました。また、ウオーカーで訪れた全国五百の市町村長に署名していただいた三幅の伊能小図のレプリカを、伊能忠敬記念館に贈呈し、佐原市関係のみなさんと伊能ウオーカーの成功を祝つて乾杯をしました。

と、ここで伊能ウオーカーは完結するものと考えていましたが、そうではなかつたのです。

「伊能ウオーカー番外編」登場

伊能ウオーカーが、フェニックスのようによみがえつたのです。時系列にあげると、次のとおりです。

△二〇〇一年△

① 一月二二日～十四日「伊能隊大内隊長と歩こう！ ウオーカー」三日間、各10キロ。

② 四月二日～十日の九日間、「伊能ウオーカー番外編パートⅠ伊豆半島一周ウオーカー」(270キロ)

③ 五月四日 「東京国際スリーデーマーチ」会場で「伊能ウオーカー報告会」

④ 十月二十日 「伊能忠敬銅像除幕式」および「銅像建立記念ウオーカー」

東京駅(6キロ) 富岡八幡宮(10キロ) 上野

- ⑤十一月三日 「日本スリーデーマーチ」の会場で「伊能ウオーカー報告会」
- ⑥十一月十七日 映画「伊能忠敬——子午線の夢」東映系で封切
△二〇〇二年△
- ⑦一月五日 「東京十社初詣ウオーカー(東京ウォーキング協会主催)」
富岡八幡宮伊能忠敬銅像前から出発、17キロ
- ⑧一月十八日(二五日) 「伊能ウオーカー番外編パートⅡ大隅半島一周ウオーカー」(230キロ)
- ⑨一月二七日 NTV「知つてゐるつもり——伊能忠敬五五才から驚異の踏破三万五千キロ。奇跡! 歩いて測つた地球の大きさ」放映。
- ⑩六月九日 「第一回伊能銅像ウオーカー(2002)」
△二〇〇三年△
- ⑪六月一日(八日) 「伊能ウオーカー番外編パートⅢ下北半島一周ウオーカー」
- この中でもっとも重要な柱は、②⑧⑪の「伊能ウオーカー番外編」です。伊能ウオーカーは日本一周したとはいえ、日程の関係で、どうしても訪れることができなかった半島や海岸線が残りました。そういう地域の市町村からは、「どうして私たちの町にきてくれなかつたのですか」と残念がる声もあがつていていたそうです。そこで日歩協では、そうした地域を十年かけて踏破しようという遠大な計画をたてました。伊能ウオーカーが東京ゴールをしてから、わずか三ヶ月後にある昨年の四月から、②の番外編「伊豆半島一周」を実施したのです。そして本年一月早々には、⑧の「大隅半島一周」も無事成功裡に終了しました。

伊豆の桜と大隅から見た開聞岳・桜島

伊豆半島はちょうど二百年前に第二次伊能測量隊が歩いたと同じよう、熱海から時計回りで伊東、下田、東伊豆、松崎、土肥と主に海岸線を歩き、沼津にゴールイン。距離もアップダウンもいくつかの峠ごえもありましたが、好天に恵まれた上、どの道を通つても歓迎してくれる満開の桜を愛でながら歩き、宿にたどりついては温泉につかり、朝夕新鮮な魚を食べて、参加者約百名大満足なパートⅠでした。

一方大隅半島は、伊豆半島にくらべて遠隔地にあるため、参加者は約六十名。その点受け入れ側のウォーキング協会を中心に、行政や観光協会などもあたたかく遇してくれました。鹿児島県には第三セクターや町営の新しく清潔な温泉つきの宿舎が多く、ここでも温泉三昧のぜいたくを味わいました。

コースは宮崎県日南市の飫肥城公園から串間市をへて鹿児島県に入り、志布志町、高山町、佐多町、根占町、鹿屋市、垂水市をへて、桜島にゴールイン。一八〇九年の第七次伊能測量隊は、大隅半島の海岸線を測量しています。伊能番外隊は道路事情のため、行程の四分の一ほど、中央部の山道を南下する道を辿りました。

圧巻は鹿児島を象徴する二つの山、開聞岳と桜島の雄姿でした。佐多岬から大隅半島西岸を北上すると、鹿児島湾(錦江湾)ごしの左前方に見えかくれしながらだんだん大きくなり、やがて真横になつたかと思うと、まだだんだん小さくなつてゆく「薩摩富士」の開聞岳。知覧から出撃する特攻隊員が別れを告げに飛来したという言い伝えにふさわしく、海辺から崇高に屹立する姿が長い間見られました。今度は桜島がだんだん大きく見えます。前方に桜島、左後方に小さく小さくなつて、やがて視界から消えてゆく開聞岳。振り返りながら、こ

の二名山を同時に見られたのは、歩く旅の醍醐味といえましょう。

大正三年の大噴火の百年ほど前に作成された伊能図の桜島は、錦江湾に浮ぶ丸い「島」で、船でしか渡れませんでした。平成の番外隊は垂水市を北進、いまは溶岩で地続きになっている桜島まで歩いて行けます。測量隊から二百年近くの歳月の経過を、しみじみと実感しました。溶岩展望台に立ち四方を眺めると、桜島は想像以上に大きく、標高一一七㍍の高い山でした。いまは噴火は止んで、白い水蒸気を吹き上げるだけですが、いつかまた猛り狂う日があるのでしょうか。

「時代」と「人」の出会い

歩行距離と実施期間の長さといい、参加者数といい、伊能ウオーカーという破天荒なイベントが、成功をおさめたのはなぜでしょう。身びいきにも、「時代」と「人」が二百年の時空をこえて出会い、美しい雪の結晶のように結実した——または、二つが縦糸、横糸となつて美しく織りあがれた曼陀羅絵図が完成した、と勝手に結論づけてみました。一般市民の側にはバブルの時代、飽食の時代から健康志向の時代への転換期がおとずれていたという時代背景もありました。

「人」の核はもちろん、「実測地図の祖」伊能忠敬さんその人です。五十才で佐原から学問の道を志して出府し、五年間曆学、天文学を学んだあと、一八〇〇年（寛政十二年）測量の旅に出ました。

「中高年の星」忠敬さんに続け

忠敬さん出立時の五十五才は、現代におきかえれば定年後の年令でしょう。定年後の約二十年前後を、いかに生き甲斐をもつて健康にするかが、現代日本人の大きな課題になっています。

「第二の人生」を真摯に充実して見事に送り、世界からも賞賛され

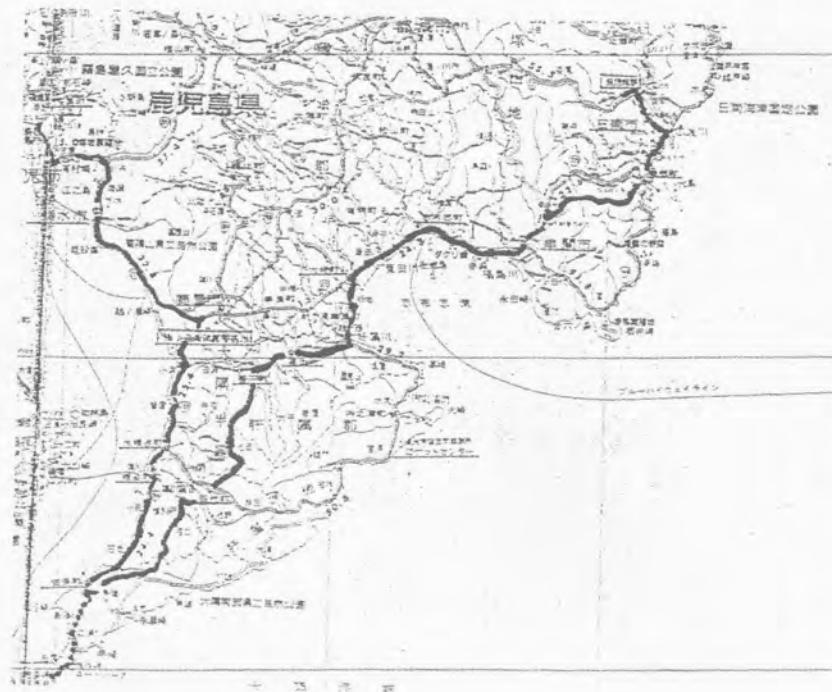
た精緻で美しい伊能図を後世に残した忠敬さんは、「中高年の輝ける星」であり、よきお手本として、近年つとに再評価されていたのです。

世紀をつないだ伊能ウオーカーは「四千万歩の男」の作者・井上ひさしさんや、協賛団体や会社など各方面に負うところ大です。しかし、延べ十七万人に及ぶ人々が参加したからこそ、大輪の花になったのです。伊能ウオーカーに初参加してすっかりハマってしまい「追っかけ隊員」に変身してしまった人もいます。子供づれの家族や、若者のグループの参加もありましたが、やはり圧倒的に多かったのは、中高年層の人でした。自分の財産と健康は、自分で守らなければならぬ年代なのでしょう。ウオーキングは、だれでも、いつでも、どこでも、手軽にできるスポーツで、格安にできます。いま三千万人の愛好者がいて、毎日どこかで大会が開催されているほどの花ざかりのウオーキングブームです。みなさまもどこかでたまには参加されませんか！

「第二回日本一周伊能ウオーカー」も視野にいれて

前記⑪のよう、番外編パートⅢは来年の六月上旬、下北半島と決定しています。ではその次の二〇〇四年は？ 伊豆半島、大隅半島、下北半島と進んできていますので、日本海に面したどこかの可能性が大です。白いままの海岸線をぬりつぶしていく先は？ 十年たつたら？ なんと日歩協は、ふたたび全国を踏破する「第二回伊能ウオーカー」を開催するという遠大な計画も視野にいれています。長距離歩行によって健康を増進させ、歩行文化を向上させるのだそうです。もともと「実測地図の祖」伊能忠敬さんの業績を顕彰し、その足跡をたどるという高邁な理念のもとにはじまつた歩く旅です。忠敬さんを尊敬する人々の集合体である「伊能忠敬研究会」の会員として、こんなうれしいことはないと思いませんか。

（元伊能ウオーカー本部隊員）



伊能ウオーク番外編・大隅半島のコース図

点線: 佐多岬は自動車専用道路で歩行せず



大隅半島ビッグウォークの出発式

一月十八日宮崎県日南市飫肥城公園

「伊能忠敬図書館」が開館しました

前田幸子

伊能忠敬に関する情報の集積所としてホームページ上に「伊能忠敬図書館」を開設しました。昨年まだ暑い頃から工事にかかり十一月に末に仮オープン、現在もまだ一部工事中ですが、入館できるようになりました。構造は玄関、閲覧室、資料室、休憩室と、今のところ平屋建て、三室のみの簡素な構造です。閲覧室は単行本を、資料室は雑誌・論文その他の資料を収蔵しています。休憩室は現在も工事中ですが、忠敬先生にまつわる面白いエピソード、意外な情報や写真などが見られる楽しい部屋になる予定です。現在、閲覧室に収蔵されている図書は145冊。「地図」VOL34 NO2 1996（湘南短期大学 中村宗敏）を基に配架しましたが、その後高木崇世芝氏作成の「伊能忠敬関係文献目録」（労作！）の寄贈を受けましたので、これを本棚に並べることにより、蔵書が大幅に増える見込みです。

蔵書を眺めわたしますと、最も早い時期の単行本は一八八一年（明治十五）の「伊能忠敬翁事跡」であり、最も新しい単行本は二〇〇一年（平成十三）の「冬の偉人たち」です。その間百二十年の間に伊能忠敬に関する実にさまざまな書物が刊行されました。概観しますと明治期には「偉人伝」的なものが多く、昭和に入つてから測量家・科学者としての業績が見直されました。近年は「一身にして二世を経た」忠敬の生き方に注目が集まり、最近では伊能ウオーカーのブームに乗つた「歩く」ことに着目した書物が多数出版されているようです。伊能忠敬は読み手の関心のあり方にしたがつて、多彩なアプローチが可能な人物であることが伊能図書館蔵書からもよくわかります。

さて、この図書館はあくまでもバーチャルなものなので、画面上で情報を提供するだけであり、実際に書籍そのものを所蔵しておりません。したがって閲覧者の方はこの図書館から借り出して読むのではなく、書名や出版社を手がかりにして書店や図書館などで入手して読むことになります。今のところ提供できる情報は書名・著者名・出版社・発行年のみですが、将来的には図書ごとに内容紹介や読むべき本かどうかの重要度（ランクづけ）も行つていい、伊能忠敬の研究をする上で助けとなるようにしたいと考えています。書名をクリックすればその書物についてあらましがわかる、というが目標です。

つきましては会員の皆さんへご協力を願いいたします。伊能図書館に収蔵されていない伊能忠敬の関係図書が見つかりましたら是非ご一報ください。また収蔵されている図書についても、お読みになつた読後感想をお寄せ下さい。その際、①内容の要約②重要度（一ツ星・三ツ星）③所蔵図書館名等（入手しにくい本の場合）をお書きになつてメールもしくは葉書等で伊能忠敬研究会事務局内「伊能図書館」司書担当までお寄せ頂けると幸いです。皆様から寄せられた情報を格付けの参考にさせていただきます。

「伊能忠敬図書館」を「伊能忠敬のすべてがここにある・忠敬ワールド」の構築を目指していきたいと思いますので、ご意見・ご感想をお寄せ下さい。最後になりましたが、この図書館への入館は伊能忠敬研究会のホームページからお入りください。

左のページに閲覧室・資料室の文献リストのほんの一部だけ掲載いたします。インターネットで見たことが無い人にもイメージがつかめると思います。

（伊能忠敬図書館・館長兼司書）

伊能忠敬図書館

ようこそ伊能忠敬の書斎へ

あなたは00975人目の入館者です。

◆閲覧室
◇単行本

◆資料室
◇雑誌
◇論文

◆休憩室

閲覧室(単行本)

138	私の伊能ウオーク 574日—ニッポン 再発見の旅—	畠中一	現代書館	2001年	
139	伊能測量隊 東日本をゆく	渡部健三	無明舎	2001年	
140	伊能測量隊 伊豆をゆく	佐藤蔵郎	創栄出版	2001年	
141	伊能忠敬丹波を歩く	横川淳一郎	自費出版	2001年	

資料室(雑誌・論文・他)

190	伊能忠敬関係伊能家文書「書簡」について	安藤由紀子	伊能忠敬研究 (伊能図探究改名)	7	1996年	
191	もう一つの忠敬の家訓	渡辺一郎	伊能忠敬研究	7	1996年	
192	現代地図に測量隊の足跡を辿る	清水清夫	伊能忠敬研究	7	1996年	
193	測量日記解説	渡辺孝雄	伊能忠敬研究	7	1996年	
194	第6次測量日記(一)	佐久間達夫	伊能忠敬研究	7	1996年	
195	伊能図探究(七)東京大学総合研究資料館蔵伊能中圓・伊能三郎右衛門家(自蔵)測量下図寺山口県文書館毛利文庫蔵 伊能大図	伊能日本図探究会	伊能忠敬研究	7	1996年	
196	フランスにあった伊能中圓の里帰りについて	渡辺一郎	地図ニュース	282	1996年	
197	月刊ウォーキングマガジン特別編集「伊能ウオーク全記録」	社団法人日本ウォーキング協会監修	講談社		2001年	

忠敬談話室だより

忠敬のどんなところに魅力だと思いますか？

大治郎「まだ日本の形というものが全く分かっていなかつたときに、

ゼロから初めて今の日本地図と比べてほとんど狂いがない正確な地図を作つた、その想像力はすごいなと思いました。」

○「アメリカ議会図書館の伊能大図」里帰りに向けて
渡辺代表が昨年みつけた「伊能大図」の今後の取り扱いについて、さきごろ「伊能大図（米国）展」実行委員会が結成されました。日本地図センター、日本国際地図学会、国土地理院、伊能忠敬研究会、全国測量設計業協会連合会、日本測量協会、日本土地家屋調査士会連合会、日本ウォーキング協会、共同通信社、中日新聞社などが構成メンバーとなり、日本地図センターの大竹理事長が会長に、渡辺代表が事務局長に選任されました。国土地理院の全面的なバックアップは心強いかかりです。NHKの参加も予定されています。

公開・展示は国内主要都市。博物館展（会場：博物館）は米国議会図書館所蔵の実物（一部）及び複製図展示とその他の伊能忠敬関係展示等を。フロア一展（会場：体育館等）では、複製図、忠敬関連展示を予定。併せて図録など記念出版が企画されます。

公開の時期としては来年（二〇〇三年）秋ごろから一年間が目途になりそうです。ご期待下さい。

（編集部）

剛「僕、地図って素晴らしいと思うんです。自分が今どこにいるか、その人のいる場所は自分からどれくらい離れているのか、位置を確かめるためには、僕らはまず地図を開いて考えますよね。そういうことでお互いのつながりができるてくるし、それが大きくなれば世界にもつながっていくようになると思うんです。そんなふうに地図は自分を考え、他人を考え、他の世界を知るための基本だと思うんです。この映画は地図をもう一度見直してみるときつかけにもなるんじゃないでしょうか。」

役作りのアドバイスは

親子で共演してお父さんから見た俳優加藤大治郎は如何がでしたか剛「今回は彼にとつて初めての時代劇でしたので、大変な苦労があつたと思います。でもこの役をよく理解して的確に表現してくれたと思っています。」

○映画つていでですね。
親子共演・「伊能忠敬・子午線の夢」
二〇〇二年三月のキネマ旬報の二〇〇一年日本映画ベストテンの選考に当つて、委員五八名のなかの一人の映画評論家が、ベストテンに推してくれたのは意義のあることで、一つの金字塔に扱つてもらえた。

親子で出演した伊能忠敬役の加藤剛さんとその息子・秀蔵役の加藤大治郎さんに、映画雑誌「シネ・フロント」298では、『話題の人・訪問』と題して特別に六ページをさいていた。

大治郎「自分でそういう状況に置かれたらどう行動するか自分なりに考えてやりなさいと言う感じで、ああしきこしきとはあまり言わなかつたですね。……初めての時代劇でしたので、体に着物がなじむよう、父から一揃い和服を借りて着付けから教わり、クランクイン一ヶ月前から家でずっと着て生活しました。」

剛語録から「俳優を演じるとき自分の中にその役を呼び込んで、役づくりの準備をする段階から撮影が終わるまで、家に帰つてもずっとその役を生きているわけです。役が変わるとその都度、自分の中に棲

みつく役の人も変わりますので、それが自分なのかわからなくなるようないときもあるんですね。今回は特に舞台・映画と続きましたし、『平成の伊能忠敬ニッポンを歩こう・二十一世紀への百万人ウォーク』にも参加して、三年間ずっと伊能さんとつきあつてきましたから、自分の中からなかなか伊能さんが抜けていかないんです。」「大治郎さんが忠敬役になつて、二代にわたつて舞台・映画ができるようになるといいな」とは私だけの夢ではないだろう。

○またまた発見 地元の子が喜ぶ 忠敬パワー
タウン誌『深川』が12月25日発行第144号になんと10ページにわたる特集「伊能忠敬」を作つてくれた。
深川に忠敬がやつてきた！新たな祭り誕生か？
『忠敬ふるさと紀行』 小江戸 佐原を歩く
忠敬を徹底解剖 ここさえ押さえておけば大丈夫 どうも本を読むが苦手でね どんな人物だったか急いで知りたい……という方におスメの忠敬ワンポイント講座

「忠敬は『婿どの』だった」「深川で地球の大きさを測つた！？」「事業の成功者でもあつた」「暦学ってなんだ？」「あだなは推歩先生」「伊能図は明治時代から活用された」「測量はボランティア？」など

「ここから測量は始まつた。歩測練習の道」と題して、次のように詳しく書いてくれた。【日本全国へ測量に出かけるきっかけになつたのは、この「練習歩測の道」。黒江町の自宅から清澄通りを北上し、両国橋を渡つて高橋至時のいる暦局へ。そして暦局から雷門、観音様の本堂、吾妻橋を渡つて清澄通りを南下する約9.5キロコース。忠敬の歩幅は69センチ。コースには見どころもいっぱいだから、万歩計を腰につけて歩いてみるのも面白い。】

囲み記事として

佐原は青春時代のふるさと 富岡八幡宮宮司 富岡興永

宮司は昭和16年から20年まで佐原高校（旧制佐原中学校）へ通学していたという。

ざつと以上のように、あらましを羅列しただけでも大変要領よく、NON STEP BUSのように、お年寄りから子供までに好奇心を満足させる小冊となつてゐる。

○新連載歴史ロマン探訪に登場 「潮」（2002年／2月号）
「東京から車で1時間ほどのところにあつた。高速インターを下りると沿道を緑に覆われた、いかにも郊外らしい風景が広がつた。町の真中を流れる小野川に架かつた橋の上には、年配の男女が並んで、旗を持つたガイドの説明をきいている。」こういう書き出しで始まつていた。ざつと読むうちに、ひとつ目に付く記事を紹介したい。

『忠敬が成功した要素を分析すると、まず、伊能家の当主として先輩・景利（かけとし）の存在が挙げられる。読書家の景利は、多くの蔵書を持ち「忠敬はここから多くを学んだ」、隠居後に二十巻を超える佐原村の歴史書を編纂した。忠敬が景利を見て、自分も隠居となり自由に使える時間が持てるようになれば、後世に残る事業を起こしたいと思つても不思議ではない。』『さらに、商才のあつた忠敬は、隠居後に志を実現するための経済的な基盤を築いていた。』……『つまり、規範を示してくれる先達があつて、ことに臨んで充分な備えをし、忍耐強く挑戦を続ければ、不滅の存在になれる。しかもそのためには年を取つてからでも遅くない。これが忠敬の生涯が送り続けるメッセージなのだ。』以上は、すこぶる常識的のものだとはいえ、近頃の伊能忠敬をとりあげたメディアには無い話ではないかと思う次第です。（山本）

■伊能測量の鳥取県倉吉市・八橋往来が夢街道モデル地区に

お知らせ

鳥取の上田勝俊さんからのお便りです。先頃、地域づくりを支援する「夢街道ルネサンス推進協議会」は町並みや道など歴史文化資料を生かした地域づくりに取り組む「夢街道モデル地区」に八橋往来などが認定された。八橋往来は伊能忠敬が測量したといわれる江戸時代の主要街道で、地元の「伊能忠敬の足跡をたどる協議会」を中心に古い町並みを保存・活用し、観光・地域振興に結び付けようと整備構想を計画しているもようが日本海新聞に掲載されました。

■今日の北海道新聞です。札幌テレビ放送の遊佐真己子さんから歴博の大図発見についての若さあふれるお便りです。

『おはようございます。やはり、今日の北海道新聞朝刊にドドーンと載りました！ 渡辺さんに連絡を頂いたおかげで「ど、どういうこと？」とならずに済みました。ただ、ニュースとしては昨日のムネオ議員のせいで二十秒しか紹介できず：：本日は一分三十秒くらいで放送する予定です。しかし、やっぱり私が直接行きたかった！ というのが、今の思いです。残念ながらカメラマンが心をこめて撮影してくれなかつたようで、映像は不満足なんです。：：』 3/12

■新潟支部長に小林一三氏

小林さんは新津市にお住まい、新潟県土木史研究会会長です。前新津市長さんです。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

■千四百人あまりの「芳志者名がタイムカプセルに納められました。

この忠敬銅像前で「測量の日」記念として、六月九日には第一回伊

能銅像記念ウォーキングなど予定されています。歩測大会は「伊能

江戸ヘビックウォーキング」など予定されています。歩測大会は「伊能

ウォーキング歩測大会」と呼称替え、今年の予選会（達人戦）はつくば（国土地理院）と富岡八幡宮が会場になります。

（福田）

○伊能忠敬研究会春季例会・総会案内

○○二年度春季例会を公開講演会として開催いたします。公募の都合があるため、会員の出欠につきましては同封はがきで四月末日までにお知らせ下さい。

□公開講演会

①日 時 六月八日（土） 13・00～16・30

②場 所 富岡八幡宮結婚式場（東京都・江東区）

③講師と進行

・開会挨拶 13・30 富岡八幡宮宮司 富岡興永

・講演1 13・40 富岡八幡宮と伊能忠敬について

伊能忠敬研究会代表理事 渡辺一郎

・講演2

15・00 伊能忠敬の江戸日記より

元伊能忠敬記念館館長 佐久間達夫

・質疑応答

16・00 伊能洋、渡辺一郎、佐久間達夫

・閉会

16・30

④入場無料 先着二百名申込制 開場 13・00

⑤主 催 者 伊能忠敬研究会、富岡八幡宮

⑥後 援 江東区役所、江東区教育委員会、伊能忠敬研究会

ク実行委員会（予定）

□終了後伊能忠敬研究会総会 17・00～17・15

懇親会 17・15～19・00 懇親会費五千円

司会・前田幸子 ほか

伊能忠敬研究会御案内

一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方はどなたでも入会できます。
二、つぎのような活動をおこなっております。

①会報の発行

発表誌 年三回以上、交流誌 年三回以上

②例会・見学会の開催

③忠敬関連イベントの主催または共催

④その他付帯する事業

三、入会方法等

入会を希望される方は、郵便振替の送金者氏名欄に住所、氏名、電話番号、FAX番号などを明記し、通信欄には専門分野、趣味分野、入会の動機、本会に対する希望など御意見を書き添えて、入会金四千円、年会費六千円、合計一円を左記にお送り下さい。

会計年度は、四月から三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度のバツクナンバーをすべてお送りします。

送金先
(室番が六一八に変更。乞御注意)

〒162 東京都新宿区下宮比町二の二八の六一八

伊能忠敬研究会

郵便振替口座 〇〇一五〇一六一〇七一八六一〇

投稿規定

会員は発表誌、交流誌に投稿することができます。一回の掲載は、原則として四頁です。越える場合は分載または、間隔をおいて掲載します。提出原稿は返却しません。採否は編集部に一任して下さい。

一頁は二段組31字×26行、三段組20字×30行です。タイトルは五行分とします。写真、図表は大きさを考慮して下さい。

伊能忠敬研究会のホームページは三つあります。一般情報は大友常任理事の担当です。それぞれがリンクしています。

<http://www.2s.biglobe.ne.jp/~auto/inoh.html>

史料情報は、「資料室」として坂本幹事が担当しています。現存する伊能図の所在一覧、伊能忠敬関連史料リストなどが御覧いただけます。

<http://www.cityfujisawa.ne.jp/~t-sakamo>

忠敬関係の図書、文献資料は「伊能忠敬図書館」です。前田幹事が担当です。」の忠敬の書斎にも是非お越し下さい。

<http://www.tt.rim.or.jp/~koko>

編集後記

○皇孫・敬宮(としのみや)愛子さまが「お宮参り」をされました。以前、伊能ウオーカーは倉敷で聞かれました。「忠敬さんはほんとうにただたかと言ふのですか。敬の字はとしと読むはずだが」と。「敬」からみんなに元気を。愛子さまの健やかな成長を願っています。

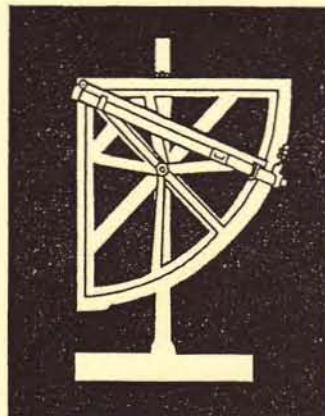
○番外ウオーカーは冬の大隅半島。南国とはいえ、帰りの桜島はうつすら白く見えました。いっぽう内之浦のロケットセンターでは寒桜、指宿では菜の花が盛りでした。内之浦の宿で伊能測量時の宿泊場所「浦人鉄藏」宅を尋ねたところ、「エツ二百年前!」見当違いました。事務所近くの外堀通りでは例年より早く桜が咲き始めました。御地ではいかがでしょうか。ひと冬越えて新しい動きが始まりました。本号締切間際に「タイムカプセル」「一枚の歴博地図」「アメリカ大図の里帰り」など。会報28号の編集にあたり、みなさまのご協力に感謝いたします。

(F)

THE INOH TADATAKA JOURNAL

STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.28 2002



TOPICS

Filming Large-scale Inoh Maps in the United States	Watanabe Ichiro	1
Burying a time capsule	Editorial Staff	8
Two undiscovered Large-scale INOH MAPS have found in museum	Editorial Staff	15
FROM VISITORS' RESISTERS	Yoko Inoh	7
REPORT ON "TAMANOURATSUBAKI"	Yoko Inoh	21
MATERIALS		
Study of "Map of Japan" compiled by Edo Goverment (2)	Takagi Takayoshi	9
Reading documents in "Sawara Kacho" (3)	Kojima Kazuhito	17
Errors in "The Trigonometric Table"	Ozawa Ken'ichi	22
Family Documents 19 The first year of Bunka	Ando Yukiko	25
Nishimura Tachu, an astronomer in Kaga	Kawasaki Michiyo	28
Following the course of Inoh Tadataka	Kawashima Etsuko	34
Kageyasu's two graves in Genkuji temple	Nagano Tatsuyo	52
REGIONAL MATERIAL		
Documents on Inoh's survey at Tsushima (5)	Irie Masatoshi	39
Diary of Inoh in Edo (7)	Sakuma Tatsuo	47
REPORTS		
"Inoh Walk" after that	Nakayama Midori	56
"Inoh Tadataka Library" opens !	Maeda Koko	60
MEETING ROOM	Yamamoto Kimiyuki	62
Toward the return of Large-scale Inoh Maps from the United States	Editorial Staff	62

Edited and Published
by
THE INOH TADATAKA SOCIETY